

●モノグラフ  
小学生ナウ  
Vol. 15-5

いじめ

目次

いじめ考 .....	深谷和子.....	2
〔調査レポート〕いじめ		
要約 .....		5
1章 けんかと意地悪・「いじめ」・いじめ非行 .....	深谷和子.....	6
いじめの概念と分類 .....		10
2章 アンケート調査をもとに		
大学生の回顧による「いじめ」 .....	杉山和義.....	15
1. 調査のねらい .....		15
2. 「いじめ」の存在 .....		16
3. 「いじめ」の方法と見えにくさ .....		18
4. 誰かに助けを求めたか .....		21
5. 「いじめ」の終結と現在への影響 .....		24
3章 面接のデータをもとに（ケースとコメント） .....		27
パート1 .....	杉山和義.....	27
パート2 .....	遠田瑞穂.....	31
パート3 .....	熊澤幸子.....	40
資料 .....		47
付章 相談室の事例から .....	中原美恵.....	51
1. 語られないいじめられ体験 .....		51
2. 発達がゆっくりな子にとっての学校 .....		52
3. うまく自己主張ができない子にとっての学校 .....		54
〔対談〕いじめをめぐって .....		
	深谷和子 vs 深谷昌志	57
資料 調査票見本 .....		66

\*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

# いじめ

# 考

東京学芸大学教授  
深谷 和子

平成7年に文部省から発表されたデータによると、学校を年間30日以上欠席した児童生徒（不登校）の数は、前年に比べてまたさらに増加し、7万7千人と過去最高だった。中学生は76人に1人で、2クラスに1人の高率となる。また、「いじめ」については暗数が多いので正確な人数は把握できないが、いじめが原因で自殺した者は前年の3件から7件に倍増した。

自殺に至るような「いじめ」は少ないにせよ、普通程度の「いじめ」の発生件数は、むしろ登校拒否の何倍にも当たると推定される。「いじめ」の当事者を、問題の性質上、被害者と加害者だけでなく傍観者にも広げると、この問題に関与している児童生徒は極めて多数となりそうだ。日本で、子どもの起こす問題行動が社会問題化してきている状況は、それぞれの子どもの素質や家庭環境要因等から生ずる個人の行動の歪みを超えて、その背景に社会的要因、文化的要因が存在することを示している。

## 『にあんちゃん』の時代の子ども

「いじめ」や不登校など、学校という場で

発生する病理は、日本が発展途上の社会だったついでの間までは、およそ考えられない問題だった。今でも、中国や台湾、韓国などからの留学生は、不登校やゲーム的ないじめがなぜこんなにも日本に多発しているのか、理解できないという。

誰もがただ貧しかった日々の暮らしの記憶は、今も年輩の人々の中にある。それほど遠い昔のことではない。おとなも子どもも、生きていくのに精一杯で、子どもたちもいじめどころではなかった。そうした貧しいが、明るくいじけることのない心象風景を、鮮やかに描き出したドキュメンタリーを探してみよう。一例として、昭和33年（書かれたのは昭和28年）にベストセラーとなった『にあんちゃん』（光文社）は、佐賀県の炭坑町に住む10歳の少女（末子）の日記である。この日記は「きょうがお父さんのなくなった日から、49日目です」という書き出しで始まっている。母を幼い頃に亡くした4人きょうだが、父をも亡くし、きょうだい4人がいたわりあって生きる姿が記されている。

例えば4月8日には、学校に弁当を持っていけなかった兄がひもじいだろうと、昼食時に4年生の末子が、自分の弁当を届けに行く

情景が日記に綴られている。

「教室にもどり、机からべんとうをとりだして、にあんちゃんの組に持って行きました。けれど、にあんちゃんはおりませんでした。まさか私がべんとうを持ってくるなど、ゆめにも思わず、あそびに行っているのでしょう。

私は、私がひもじいなら、にあんちゃんだってひもじいだろう。しかも男だからとびまわっているし、そのうえ、6年生なので帰りがおそいから、なお、はらがへるだろう。4年生は、遅くても3時には、家に帰れるからいい、と思って、持ってきたのです。

だけど、にあんちゃんがいなかったので、今まで思っていたことがなんにもならず、がっかりしてしまいました。せっかく持って行ったのに、だめになったので、そのまま家に持って帰ってねえさんとふたりでたべました。ふたりでたべたといっても、ねえさんは、ふた口ぐらいしか食べていません」

これは、4年生の少女の生活の特殊なケースではない。終戦当時は、誰もが食うや食わずで、こうしたどん底の生活を余儀なくさせられていた。

文中にある「ひもじい」という言葉を、今の子どもたちは知っているだろうか。「お腹が空いた」ことはあっても、空腹が背中まで突き抜けるような「ひもじい」という感覚はわからないに違いない。きょうお腹が一杯になれば、それでかなり十分に幸せ、という時代には、暇と退屈を持てあまして、仲間相手に残酷なゲームを楽しむ余地はなかった。

有史以来、人類は飢えと貧困、病気とに悩まされてきた。ついこの間までの、われわれの生活はそれらとの戦いの日々だった。それらの「敵」がいなくなったとき、子どもは退屈して、エネルギーの向け場を探した。いじめはいわば「豊かな時代」が生んだ「飽食の病い」なのであろう。

こうしたいじめは、いつから現在のよう

形を備え、広がりを見せるに至ったのか。一般にはあまり知られていなかったが、昭和40年代後半からクリニックで子どもの問題行動を取り扱っていたカウンセラーたちは、登校拒否の発症のきっかけに「いじめ」が関係していたケースに気がつき始めていた。そしていじめ問題が社会的に大きく浮上したのは、昭和58年9月26、27、28日、そして10月4日のNHK「おはよう広場」で、いじめを取り上げてからとされる。番組担当者によると、この間に2,500通の電話と400通の投書が局に寄せられたという。「にあんちゃん」が書かれたときから、ちょうど30年後である。

子どもといえば、可愛い者、無邪気な者、ちょっぴりワルで小賢しいところはあっても、根は単純でお人好しで、性「善なる」者たち、それが長い間のわれわれ日本人の子ども観であり、子ども理解であった。しかし、この10年ほどの間に浮上した「いじめ」問題が、その子ども観を揺るがすような恐ろしい知らせを運んできた。

「いじめ」が子ども世界にいつの間にかじわじわと広がり、おとなの知らないところで、おとなでも耐えられないような恐ろしい人間関係と攻撃行動がクラス内に展開されているなどとは、誰が想像しただろう。学校が子どもにとっての安全地帯でなくなったとは、今もって信じられない。学校は家庭以上に安心できる場として、親たちは子どもを預けていたはずだった。

むろん人生には、悪も無法も非行もある。しかしそれらに出会うのは、子どもがもっとたくましさを増してから、つまりおとなになってからのこと。おとなたちは子どもにしばらくの間、それらからのモラトリアム期間を与えているつもりだった。学校には親同様の、時には親以上でもある「先生」もいれば友だちもいる。学校は全ての子どもにとって、限りなく「いいもの」であり聖地なのだとおとなたちは思っていて、そのため長い間安心してきっていた。

しかし、近年になって「いじめ」問題が浮

上し、断片的ではあるが関連した情報の数々がわれわれの中に入ってきたとき、今までの子ども観は大きく揺さぶられた。

子どもはどうしてしまったのか。あの無邪気で、子ども子どもしていた腕白坊主たちは、どこへ行ってしまったのか。われわれは、子どもの前途にもう希望を持ってなくなってしまったのか。一体何が子どもを「いじめ」に駆り立てているのだろうか。

## 『わんぱく時代』の子ども

明治24年生まれの小説家佐藤春夫は、生まれ育った和歌山県新宮市で過ごした少年時代を回顧しながら、自叙伝的内容を持った作品『わんぱく時代』を書き上げた。そこには、少年たちが日々生き生きと過ごす、明治後期の子ども世界の情景が描かれている。少年期の戦争ごっこ、そこででの作戦、ルール、それに向けた子どもたちの心の熱さと高まり、そこにはエネルギーに満ちて生きる子どもの姿がある。子ども間にトラブルが生じたとき、教師はそれを解決してくれなかった。そこで、S少年はこういう提案を仲間にするのである。

「おれは、子ども同士の問題に先生やお前たちの親に立ち入られるのがいやだから、もうお前たちを学校の掃り道でなぐることは、今日からやめた。お前たちもそのつもりで、わいわいオタマジャクシのようにかたまって町を歩くのはやめろ。しかし、この間からのことは、そのままではすまさないぞ。どうだ、お前たちの組とおれの組とで一合戦やって、はっきりと勝負をつけよう」

そしてさらに、

「僕が参謀になってする戦争は、死んだり怪我をしたり、勲章をもらったりするのじゃない。そんなことは、大人のようなバカの仕事なのじゃ。子供には子供のする立派な戦争があるのを知らないか。(中略) 知恵と力のありったけをしぼって、自分の気のすむ

ように敵をへこまし、こらしめてくれる、子供の子供らしい戦争を、僕は考えているところなのだ」

この物語は大林宣彦監督によって映画化され、「野ゆき、山ゆき、海べゆき」として完成された。

昔の子どもの持っていたエネルギーには、ただ脱帽という他はない。しかし野外には、子どもが思う存分駆けめぐることのできる場があり、壮大なスケールで遊びに全力を尽くせる時間があった。こうした日々の中では、身内であるクラスの中でのいじましい「いじめ」など、起こるはずもなかった。

都市化、産業化、情報化、少子化など、時代を形容するキーワードがここでも、いじめの発生条件として、そのまま作用している。この学校の生みだした病理は、根が深い。10年前の鹿川君の事件の時も今と全く同じように、おとなが対応に苦慮していたことはまだ記憶に新しい。しかし、それから10年。子どもの成長環境は一向に改善されていない。今回も、また前回と同じ道筋を辿るのではなからうか。

「いじめ」は、時代の中で、子どもと子ども集団が変質してしまった結果の「あだ花」であろう。小手先の対応では解決しない。いかに子どもたちに、心も体も健やかな成長環境を用意できるか、キーワードが示すような大きな時代の変化に対して、長期的な対応策を講じることなしには決して解決しないだろう。それは学校の責任でもなく、親の責任でもない。子どもから健やかに成長できる環境を取り上げて、それを一層悪くしてしまった、「時代の責任」に他ならないと思われる。

~~~~~  
<引用文献>  
安本末子『にあんちゃん』-10歳の少女の手記-  
カッパブックス 光文社 昭和33年  
佐藤春夫『わんぱく時代』新潮文庫 新潮社 昭和61年

〔調査レポート〕

# いじめ

東京学芸大学教授

東京都立農産高等学校教諭

群馬女子短期大学専任講師

昭和女子大学助教授

江戸川区教育研究所教育相談員

深谷和子

杉山和義

遠田瑞穂

熊澤幸子

中原美恵



調査レポート

いじめ

要約

●調査概要

1. 調査主題 いじめ
2. 調査視点 いじめは見えにくいといわれるが、大学生へのアンケート調査と面接によって、いじめの実態とメカニズムを探り、その対応の資料を得ようとした。
3. 調査項目 小・中学校時代のクラスでのいじめの有無、いじめの悪質さ、いじめを誰かに相談したか、いじめられた子の理由、いじめはなくせるか、など。
4. 調査時期 1995年5月～7月
5. 調査対象 首都圏の3つの4年制大学・短期大学生
6. 調査方法 アンケート調査と面接による聞き取り
7. サンプル数 354名

1. いじめについての回顧的調査及び面接によって、子どもの世界のいじめの実態といじめのメカニズムを探り、その対応の資料を得るのが目的である。

2. はじめに、いじめ問題への対応にいじめとその周辺行為を分けることの必要性を指摘し、①けんかや意地悪、②「いじめ」、③いじめ非行、の3分類が必要であることを指摘した。幼少期にきょうだいや友だちの間で、けんかや意地悪をして成長する機会がないことが、今日の「いじめ」の背景にあると思われ、子どもの成長環境の見直しが求められる。(表A)

3. 首都圏の3つの4年制大学・短期大学生にアンケート調査を行い、小・中学校時代に体験されたいじめを明らかにし、また、いじめられ体験・いじめ体験・傍観者それぞれの立場にいた者に面接調査を実施して、さらに資料を得た。アンケート調査は、1995年5月で、サンプル数は354名。面接調査は、6月から7月にかけて実施された。(表1)

4. 小学校高学年・中学校時代に、周囲に「いじめ」やいじめ非行があったとする者は、小学校6割、中学校5割であった。(表2)

5. 「いじめ」の被害者経験は、小学校で12%、中学校で8%である。「いじめ集団の近くにいた(いじめていた)者」は、小・中学校で2割に達する。(表4)



6. 小学校から中学校にかけて、いじめは悪質化し、非行的性格を強める。  
(表5・6・7)

7. クラスにあった「いじめ」を知っていた者は、友人>担任>親の順である。とくにいじめっ子の親で、その事実を知っていただろうとみる者は、1割に達しない。これに対して、担任は小学校で7割、中学校で6割と、見えないといわれるわりには、やはり「見えている」のであろう。(表8)



8. 自分がいじめられている状況を親に話した者は、小学校時代で21%、中学校時代で16%と少なく、担任には小・中学校時代ともに13%とさらに少ない。  
(表9)



9. 「いじめ」に働きかけなかった者(傍観者)は、小学校で7割、中学校で8割にも達する(表10)。いじめられていた子は、性格的特徴があったとされ、「①弱くて社会的価値がないとみなされた者、②自分にとって目障りな者」がその主要なタイプである。



10. 「いじめ」の終結は、卒業、クラス替え、転校などのクラス解体がほとんどで、他からの働きかけはあまり効を奏していない。こうした終結は、小学校で5割、中学校で6割に達し、個々の「いじめ」に対する問題解決の難しさを語っている。しかしそれでも友人・本人自身の力よりは、教師の力はまだ多少とも大きい。(表13)

12. また、大学生・短大生の面接調査から、「いじめ」が今日の子どものおかれて、様々に抑圧された状況から発生した「人格形成上の歪み」と、発達段階上では思春期にある諸特性との交点から生み出された問題であることが示唆される。「いじめ」問題に対する対応の難しさを実感させられる。

11. 「いじめ」は今後なくせるか、の問いに対して、学生の7割はなくせないと答えている。(表16)

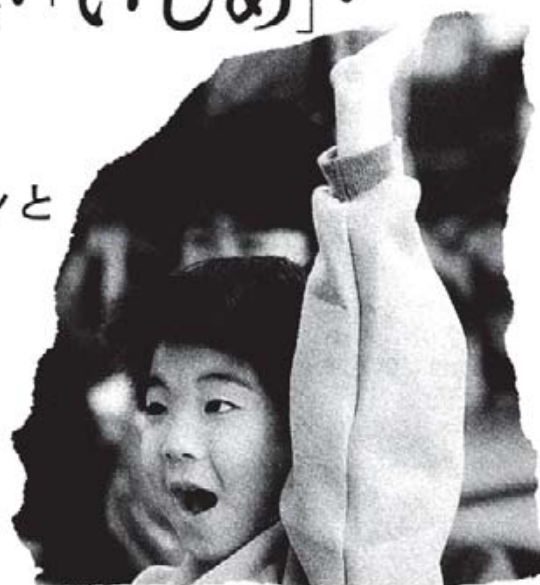


## 1 章

# けんかかと思地悪・「いじめ」・ いじめ非行

——いじめのアウトラインと  
発達的な意味——

東京学芸大学教授 深谷 和子



いじめについては、すでに昭和59年（「小学生ナウ」vol. 4-2 いじめ）に筆者と中原美恵によって、小学生対象に行われた調査の結果を中心にレポートが刊行されているが、10年を経た今、この号では、いじめについての大学生対象のアンケート調査（回顧的調査）と面接資料によって、いじめの実態と子どもたちのいじめ心理をより十分に解明して

いくことを企図している。

それに先立って、いじめについては現在その概念や分類が十分でないまま、議論や扱いが進められている現状がある。いじめの本体についての峻別の必要性にふれながら、この問題についてアウトラインを示しておくことにしたい。

## いじめの概念と分類

いじめという言葉は、最近むやみに使われすぎているのではなからうか。

その都度吟味してみると、本当にいじめと呼んでいい場合もあれば、友だち同士のちょっとしたいさかいにすぎない場合もある。とくに親たちの間には不安と緊張が広がっていて、「子どもがいじめられた」と担任に訴えてきた母親に事情を聞いてみると、子どもがその日学校で、野球の試合に出る選手のこと友だちともめてこづかれ、そのことを家に帰ってから母親にちよっぴり言ったら、母親が血相を変えてあれこれ聞きただし、担任に連絡したというようなエピソードが次々と出てくる。担任もいじめにはびりびりしており、「クラスにいじめらしきものがあるそうだ」となれば、とにかく介入して抑止しないと、あとあと「どうしていじめを放置しておいたのか」と追及される恐れがある。いじめはかなり主観的なもので、ちょっとした意地悪であっても、それをいじめられたと感じるか、単なる意地悪と受け流すか、子どもによって感じ方も違う。針小棒大なときもあれば、逆のこともある。

しかし、何もかもいじめにしてしまっただけのびのびけんかも対立もできないことになる。

いじめを考える、あるいはいじめを扱おうとするときには、まずこうした「いじめ」といじめの周辺概念について整理し、区別して言葉を使い分けることが大切であろう。現在は、それをしないままに言葉が使われているので、混乱が生まれ、いじめの正体がさっぱり見えなくなっている。昔話の「浦島太郎」の海辺で子どもたちが亀にしていたいたずらも、例えば「デブ菌」とあだ名をつけられて囃されるのも、トイレへ呼び出されて蹴飛ばされるのも、4万円恐喝されるのも、どれもいじめという言葉で一括して扱われては

混乱するだけだ。

いじめについて文部省は、「生徒指導上の諸問題の調査」で、次のような定義をしている。

「①自分より弱い者に対して一方的に ②身体的心理的攻撃を継続的に加え ③相手が深刻な苦痛を感じているものであって、学校としてその事実（関係児童生徒、いじめの内容等）を確認しているもの、なお起こった場所は学校の内外を問わないものとする」

こうした定義によって、従来曖昧だったいじめの性質を、多少とも正確に記述することができる。しかし実際のケースを扱う際には、この定義でも、しばしば問題が残る。例えば相手が弱いか弱くないかの判断が難しく、行為の継続性もどの程度がそう判断できるかははっきりしない。また、無視型のいじめでは、毎日いじめのターゲットが変わるケースもある。苦痛についても、身体的な痛みですら人の感じ方にはかなりの差がある。まして心理的苦痛となると、感じ方にはもっと差がみられよう。

いじめとそうでないものとの境界は、今なお、しばしば曖昧である。形だけに着目するのでなく、何らかの意味をもとに、いじめとそうでないものの区別が必要と思われる。なぜなら、いじめかそうでないかによって、対応の仕方が違って来るからである。いじめの3条件である、①力の絶対性と、②行為の持続性、③いじめられる側の苦痛、をふまえる以外に、さらに行為の健康性や目的性に着眼して、いじめとその類似行為を分類してみる。表Aはその試案である。表にしたがって、いじめと表現されがちな行為を三分してみる。

表A いじめの分類と整理

| ① けんかや意地悪                         | ② 「いじめ」                                                                  | ③ いじめ非行                                         |
|-----------------------------------|--------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------|
| 社会化されていない攻撃性の発揮                   | 差別化・妬み・嫉妬から生ずるゲーム                                                        | 非行行為                                            |
| (問題解決の手段)                         | (利己的な行為)                                                                 |                                                 |
| (健康性)<br>どこでも発生する                 | (不健康性)<br>日本にはほ固有                                                        | (非行性)<br>どこでも発生する                               |
| 日常的・発達の                           | ゲーム性<br>うっぶん晴らし                                                          | 非行集団またはそれに近い<br>集団による非行                         |
| きょうだいげんか<br>けんか・悪口<br>意地悪<br>からかい | 菌ごっこ<br>悪質な悪口<br>無視・仲間外れ<br>嫌がらせ<br>落書き<br>物隠し                           | カツアゲ<br>暴力<br>パシリ(使い走りの略語)<br>物をこわす<br>嫌がることの強制 |
| (単発的・短期的)                         | (多くは長期に持続する)                                                             |                                                 |
| (幼・小に多い)                          | (小学校に多い)                                                                 | (中学校に多い)                                        |
| 相手は、その時の関係性<br>の中で非のある子           | いじめる側からみたターゲットとなる子の特性<br>第1因子 弱者<br>第2因子 目障り<br>第3因子 劣等<br>第4因子 ハンディキャップ |                                                 |

注) ①から②、②から③へ移行することも、しばしばである。

## 1) けんかや意地悪

発達段階の初期には、どの子どももきょうだいや仲間の中で、けんかや意地悪、嫌がらせなど、様々な攻撃性を発揮しながら育つ。つまり、相手と利害が対立したときには、がまんするか、素朴な攻撃行動を持って相手に勝とうとする。とりあえず力で優位に立った者が、その対立に勝利する。こうした行為は発達の特性であり、したがって、世界中どこの子どもの世界にもみられることである。むしろ攻撃性を発揮できず、抑圧する子には種々の問題行動が生まれることもある。臨床的にみると、おとなしく、自己主張せず、がまん強い子が必ずしも「いい発達」を遂げているわけではない。発達に伴って、こうした粗野な攻撃行動から、次第に口げんかや議論などの、より社会化された攻撃の方法をマスターしていくことが、発達課題の1つであろう。幼稚園やそれ以前の段階に、あるいは小学校の低学年に、よくみられる行動である。しかしこれらは、長続きさせることが難しく大抵その場限りで、後を残さない。しかし、はじめは①けんかや意地悪であったのが、次第にエスカレートして、次の②「いじめ」に移行していくケースもみられる。

こうしたけんかや意地悪は、かつてはきょうだいの中で盛んに試みられた。けんかや意地悪を、他人にどの程度まで発揮していいか、その限界の見極めを含めて、攻撃の仕方が体験された。そしてまた、思いきってけんかができることは、相手との間に信頼関係があり、例えけんかをしてもしそれは一時的なもので、関係はまたもとに戻ることも、子どもは学んだのである。地域に出るようになると、その経験は遊び仲間の中で発揮される。地域で出会う他人には、きょうだいより少し遠慮があり、少し手心が加えられ、時にはその後の関係が修復できない場合があることを学ぶ。これが、おとなになっていくプロセスだった。

しかし、最近はきょうだいが少なく、地域

に遊び仲間が少なく、またテレビやおけいこごとのために、子ども同士が一緒に過ごす時間が大きく不足してきている。子ども同士がお互いに、気心が知れなくなってきているともいえそうだ。攻撃性ははじめから抑制され、子どもは自分の中の攻撃性を、健康に表出する方法を学ぶことができない。

そうした条件が、次の「いじめ」(かっこ付きの「いじめ」)を多発させる土壌となっていると考えられる。

## 2) 「いじめ」

かっこ付きの「いじめ」は、一連のいじめとその周辺行為の中での本体部分と考えてよさそうである。「菌ごっこ、無視や仲間外れ、悪質な悪口、嫌がらせ、落書き、物を隠す」などが、その主な種類である。この「いじめ」は、日本の子どもの世界に近年生み落とされた、いわば鬼っ子ともいうべきものかもしれない。

「いじめ」は、1つは弱い者を対象にした「ゲームの心理」で行われ、またもう1つは「競争者に対する嫉妬心」から発生したもので、しばしば無視か菌ごっこの形をとる。

①のけんかや攻撃は発達のなもので、子どもなりの問題解決の手段ともなりうる積極的な意味を持つものに対して、②の「いじめ」は差別や嫉妬、妬みなどの否定的な感情に支えられたゲームである。ゲーム性の点で、ターゲットは誰であってもいいわけで、しばしばターゲットの移動が頻繁だ。いじめられる子といじめる子の逆転も、しばしばみられる。小学校の低学年から少しずつ始まるが、高学年になってからが盛んで、中学校では少しずつ減っていく。また、これがしばしばエスカレートして、次の③いじめ非行に発展するケースもみられる。

「いじめ」は、力における絶対の優位性、すなわち多くは集団が結束して、「1人」に対して、長期的に行われるのが特徴と定義される。

相手を差別し侮蔑する感情や、妬み、嫉妬などの感情は、人として自己抑制すべき低次元の感情であり、そうしたものと戦いが人間としての成長の過程であろう。しかし、それをゲームの形に紛らわして行動化し、おとなの側からも、それを黙認するかのような状況が生まれている現状は、全く不健康で困った事態である。

### 3) いじめ非行

③いじめ非行は、非行化傾向の高い集団において行われる「暴力やカツアゲ、使い走り、物をこわす、嫌がることを強制する」などの行為である。もともと非行性の強い集団が、集団の内外にする非行的行為である場合と、内部のメンバーを対象に暴力をふるっているうちに、次第にそのことで、集団が非行性を

帯びた集団に成長してしまう場合がある。東京都中野区立富士見中学校の鹿川裕史君と西尾市立東部中学校の大河内清輝君のケースは、後者であった可能性が高いのではないかと。

しかしいじめ非行は、とくに日本に特有な現象ではなさそうである。非行のない社会が存在しないように、いわばこうした一部の「悪い子」たちによる非行は、どの社会でもみられるし、日本でも、昔からある割合で繰り返されてきている行為であろう。発達段階では中学から増加していく。いじめ自殺の多くは、このいじめ非行が原因で起こることが多い。

こうした定義を経て、問題にすべきなのは②「いじめ」と、③いじめ非行、とりわけ「いじめ」であり、それらに社会的な対応をはからなければならないであろう。

## 2章

アンケート調査をもとに

大学生の回顧による  
「いじめ」

東京都立農産高等学校教諭

杉山和義



## 1. 調査のねらい

「いじめ」は見えにくいといわれる。子どもたちは周囲に「いじめ」があっても、先生や親に対してですら、ひた隠しに隠す。いじめに少しでも近づこうと、アンケートや面接によって、今起こっている「いじめ」を聞き出そうとしても、それは非常な困難を伴う。他の問題行動と違って、実態への接近すら難しいのであれば、「いじめ」の形や、いじめられる子どもの心理も理解できず、いい解決策が見いだせるはずもない。

今回われわれは、「いじめ」の実態に接近する手段として、大学生に対する調査を行った。大学生はほんの6、7年前には小・中学生だった。そこで彼らに、小・中学校時代の「いじめ」を思い出してもらってアンケートを実施し、さらに「面接に応じてもいい」と

言ってくれた人々には面接による聞き取りを行った。その結果が、今回のデータである。

「いじめ」に関するアンケート調査は1995年5月に、首都圏の4年制大学・短期大学生(3校)を対象に行われた。有効回答は、男性223人、女性131人の合計354人で、このうち1年生が63%であった(表1)。今現在の当事者である子どもに、直接聞くことが難しいことを考えれば、これらの結果は、「いじめ」の比較的新しい状況を示すものといえるだろう。

またこの調査では、「いじめ」を正確な定義を経たものとしてではなく、回答者が当時何となく「(集団で)いじめた・(集団から)いじめられた」と感じていたものを「いじめ」と考えて、回答してもらった。ただし

表1 サンプル (大学・短大生)

|    |     | (人)                                             |                         |
|----|-----|-------------------------------------------------|-------------------------|
| 男性 | 223 | * 調査時期 1995年5月<br>(公立小学校児童 95.2% 公立中学校生徒 90.2%) | (1年生 62.5% 2年生以上 37.5%) |
| 女性 | 131 |                                                 |                         |
| 計  | 354 |                                                 |                         |

「クラスに暴れん坊が1人いて、周囲に暴力をふるっていたようなケースは、今回の調査の「いじめ」の範疇には含めません」と書き

添えてあったので、ここで取り上げられたいじめは「いじめ」「いじめ非行」にほぼ近いものと考えられる。

## 2. 「いじめ」の存在

まず「いじめ」が、彼らの周囲にどのくらいあったかをみてる。

小学校(高学年)時代、「いじめがあった」とする者が61%、中学校時代では53%。そのうち「クラスであった」は、小学校時代99.5%、中学校時代92%。部活動や塾での「いじめ」も中学校では多少あったことがわかる(表2)。しかしほとんどの「いじめ」はクラスという特定の集団の中で起こっている。

また表3に示したように、サンプルの場合354人中、1度でも「いじめられた」経験をした者は小学校時代41人(12%)、中学校時代では29人(8%)となっている。

次に「いじめと自分との距離」を聞いてみた。表4が示すように「自分がいじめられた」ケースは、小学校時代12%、中学校時代8%だが、「いじめ集団の近くにいた」者は小学校時代23%、中学校時代21%と、小・中

学校時代とも約3割の者が被害者か加害者として、直接いじめに関係していたことがわかる。さらに「自分と関係ない所で」小学校時代31%、中学校時代31%と、いじめるでもないが、いじめの存在を知っていたという「傍観者」をも含めると、クラスの半数以上が何らかの形で「いじめ」にかかっていたことになる。

また表5によると「いじめの参加者」は、「クラスの大部分で」「いじめ」に加わっていたケースが小学校時代33%、中学校時代25%。「一部の普通の子が」していたケースが小学校時代48%、中学校時代41%と、こうしたタイプの「いじめ」は小学校時代の方が発生率が高い。逆に、「一部の非行があった集団」でのいじめ、すなわちいじめ非行は、小学校時代11%、中学校時代24%と倍増し、中学校時代から非行があった集団の存在が明確になっている。



表2 小・中学校時代のクラスでの「いじめ」の有無

数字は実数、( )内は%

|     |     | 全 体    | クラスで       | 部活動で     | 整 で     |
|-----|-----|--------|------------|----------|---------|
| 小学校 | あった | (60.7) | 214 (99.5) | 0 (0.0)  | 1 (0.5) |
| 中学校 | あった | (53.1) | 173 (92.0) | 12 (6.4) | 3 (1.6) |

(小学校は高学年)

表3 いじめられていた子

数字は実数、( )内は%

|     | 自 分       | 他 人        |
|-----|-----------|------------|
| 小学校 | 41 (11.6) | 196 (55.4) |
| 中学校 | 29 ( 8.2) | 201 (56.8) |

(複数選択、%は全体の中の比率)

表4 「いじめ」と自分の距離

数字は実数、( )内は%

|             | 小学校        | 中学校        |
|-------------|------------|------------|
| 自分がいじめられた   | 41 (11.6)  | 29 ( 8.2)  |
| いじめ集団の近くにいた | 83 (23.4)  | 74 (20.9)  |
| 自分と関係ない所で   | 111 (31.4) | 109 (30.8) |

(複数選択、%は全体の中の比率)

表5 「いじめ」の参加者

数字は実数、( )内は%

|             | 小学校        |   | 中学校       |
|-------------|------------|---|-----------|
| クラスの大部分で    | 73 (33.2)  | > | 57 (25.3) |
| 一部の普通の子が    | 105 (47.7) | > | 92 (40.9) |
| 一部の非行がかった集団 | 25 (11.4)  | < | 53 (23.6) |
| その他         | 17 ( 7.7)  |   | 23 (10.2) |

### 3. 「いじめ」の方法と見えにくさ

次に「いじめ」は、どのように行われるのか。表6が示すように、「悪口」「無視・仲間外れ」「菌ごっこ」など比較的単純な行為は中学校時代より小学校時代に多い。ここでいう単純とは、中学校時代の行為との比較で

いっているのであって、いじめられている側にとって苦痛であることに変わりはない。そして「暴力」「嫌な仕事を押しつける」「机の中を荒らす」「使い走り」「物をこわす」「カツアゲ」など悪質な行為が、中学校時代に

表6 「いじめ」の方法

数字は実数

|            | 小学校 |   | 中学校 |
|------------|-----|---|-----|
| 悪口         | 162 | > | 144 |
| 無視・仲間外れ    | 153 | > | 128 |
| 菌ごっこ       | 131 | > | 61  |
| 物を隠す       | 50  |   | 57  |
| 落書き        | 59  |   | 60  |
| 暴力         | 38  | < | 89  |
| 嫌な仕事を押しつける | 45  | < | 54  |
| 机の中を荒らす    | 22  | < | 37  |
| 使い走り       | 23  | < | 63  |
| 物をこわす      | 16  | < | 42  |
| カツアゲ       | 8   | < | 29  |
| その他        | 11  | < | 16  |
| 計          | 718 |   | 780 |

(複数選択)

なって増えている。

このことは、次の設問の「いじめの悪質さ」でも表れている。その当時、体験・見聞していた「いじめ」を「極めて悪質」「かなり悪質」だったとする評定を合わせると、表7が示すように、小学校時代では5%、中学校時代では20%と、中学生になっての悪質化が明らかである。

さて、繰り返しになるが「いじめ」は見えにくいといわれる。当時子どもの周辺にあっ

た「いじめ」を誰が知っていたか、「いじめの存在を知っていた人」は誰だったかを聞いてみた(表8)。担任が「いじめ」を「知っていた」「たぶん知っていた」とする者の合計は、小学校時代71%、中学校時代64%となっていて、世間でいわれているよりも、はるかに担任は「いじめ」をキャッチできるものだということがわかる。ただし、中学校では多少担任のキャッチ率は低下している。

そしてさすがにクラスの子は知っていて、

表7 「いじめ」の悪質さ

数字は実数、( )内は%

|     | 悪質でない     | あまり悪質でない   | 少し悪質       | かなり悪質     | 極めて悪質   |
|-----|-----------|------------|------------|-----------|---------|
| 小学校 | 73 (34.3) | 105 (49.3) | 25 (11.7)  | 7 (3.3)   | 3 (1.4) |
| 中学校 | 28 (12.5) | 52 (23.2)  | 100 (44.7) | 37 (16.5) | 7 (3.1) |

「全員知っていた」「かなり知っていた」とする割合を合わせると、小学校時代95%、中学校時代91%となる。しかし「一部の子しか知らなかったいじめ」も1割はあることもわかる。

そして親はどうか。親はやはりいちばん遠くて、被害者の親が「知っていた」「たぶん知っていた」は小学校時代45%、中学校時代41%。さらに加害者の親が「知っていた」「たぶん知っていた」は小学校時代10%、中

学校時代9%と、加害者の親についてはほとんど知らずにいることがわかる。

そして中学校になると親の知っている割合は、いっそう低くなる。前の設問にあったように、中学校時代には悪質ないじめ非行が増えるため、表面に表れにくくなるのだろう。悪質な「いじめ」は、同時に巧妙でもある。つまり「当時いじめを知っていた人」からみると、中学校時代の「いじめ」は周囲からはとても見つけにくかったことがわかる。

表8 当時「いじめ」を知っていた人

数字は実数、( )内は%

|     |     | 知っていた     | たぶん知っていた  | たぶん知らなかった |
|-----|-----|-----------|-----------|-----------|
| 担 任 | 小学校 | 71 (32.6) | 83 (38.0) | 64 (29.4) |
|     | 中学校 | 76 (34.4) | 65 (29.4) | 80 (36.2) |

|       |     | 全員知っていた    | かなり知っていた  | 知らない子が多かった |
|-------|-----|------------|-----------|------------|
| クラスの子 | 小学校 | 142 (65.5) | 63 (29.0) | 12 ( 5.5)  |
|       | 中学校 | 129 (57.9) | 73 (32.7) | 21 ( 9.4)  |

|       |     | 知っていた     | たぶん知っていた  | 知らなかっただろう  | 不明        |
|-------|-----|-----------|-----------|------------|-----------|
| 被害者の親 | 小学校 | 46 (21.0) | 53 (24.2) | 72 (32.9)  | 48 (21.9) |
|       | 中学校 | 33 (14.7) | 58 (25.8) | 96 (42.6)  | 38 (16.9) |
| 加害者の親 | 小学校 | 2 ( 0.9)  | 19 ( 8.8) | 144 (66.7) | 51 (23.6) |
|       | 中学校 | 7 ( 3.1)  | 14 ( 6.3) | 155 (69.5) | 47 (21.1) |

## 4. 誰かに助けを求めたか

さて、その「いじめ」を、いじめられていた子はどうしたか。そして周囲の者は、どうしていたのであろうか。

被害者に「いじめられていることを、誰かに話したか」の設問では（表9）、「友人に話

した」小学校時代24%、中学校時代30%、「親に話した」小学校時代21%、中学校時代16%、「担任に話した」小学校時代13%、中学校時代13%となっている。小・中学校時代とも被害者は、担任や親よりも友人に相談し

表9 誰かに話したか（被害者）

数字は実数、( )内は%

|               | 小学校       | 中学校       |
|---------------|-----------|-----------|
| 親に話した         | 17 (21.3) | 10 (15.6) |
| 担任に話した        | 10 (12.5) | 8 (12.5)  |
| その他のおとなに話した   | 1 (1.3)   | 2 (3.1)   |
| 友人に話した        | 19 (23.8) | 19 (29.7) |
| いじめている子に働きかけた | 12 (15.0) | 9 (14.1)  |
| その他           | 21 (26.1) | 16 (25.0) |

ている。残念ながら担任は、友人、親の次で、いちばん話されていない。

また、親や担任に話した生徒は中学校時代の方が低い。中学生になって担任や親に話しても無駄、おとなには知られたくないという精神的自立が少しずつ強まっている過程が現れている。関連して小学校時代の方が、担任や親が把握している割合が高い。

さて、周囲に「いじめ」が起こっていたときに、子どもたちはそれをどうしたか。傍観者だった者たちに、いじめをやめさせるための働きかけをしたかどうか聞いてみた(表10)。

「働きかけて成功した」は5%を切っており、周囲からの働きかけで終結するケースはほとんど期待できないことがわかる。さらに「かなり働きかけてみたが、うまくいかなかった」「多少働きかけてみたが、途中で断念した」を合わせると、小学校時代29%、中学校時代20%で、働きかけをする子は、全体として少ないが、それでも小学校時代の方が多少は多い。

なお、「働きかけを全然しなかった者」にその理由を聞いてみたが、表11によれば、「何となく」「自分と関係がないことだから」

表10 「いじめ」への働きかけ

数字は実数、( )内は%

|             | 小学校        | 中学校        |
|-------------|------------|------------|
| 全然働きかけなかった  | 143 (70.7) | 150 (79.8) |
| 少ししたが、断念した  | 43 (21.3)  | 23 (12.2)  |
| かなりしたが、失敗した | 7 (3.5)    | 6 (3.2)    |
| 働きかけて成功した   | 9 (4.5)    | 9 (4.8)    |

表11 「いじめ」を傍観していた理由

数字は実数、( )内は%

|                | 小学校       | 中学校       |
|----------------|-----------|-----------|
| 何となく           | 49 (35.6) | 46 (31.3) |
| 被害者にそれなりの理由がある | 46 (33.3) | 41 (27.9) |
| 自分と関係がないことだから  | 14 (10.1) | 27 (18.4) |
| 仕返しがかわくて       | 12 (8.7)  | 15 (10.2) |
| その他            | 17 (12.3) | 18 (12.2) |

の合計は、小学校時代46%、中学校時代50%で、白けた感じの存在、つまり友人の運命に無関心な者が、中学校時代に増えていることがわかる。

また、「被害者にそれなりの理由がある」は小学校時代33%、中学校時代28%で、その理由を聞くと、「弱点や性格的特徴があった」小学校時代74%、中学校時代74%、「思い当たらない」小学校時代11%、中学校時代12%と、いじめっ子たちは、多分に「いじめ」を正当化している様子がみられる（表12）。アンケート用紙に書かれた被害者の特

徴は、弱い子、汚い子、動作がのろくて勉強のできない子や、何となく反感をもたれる子などがあげられている。そうした子はいじめられるのはある程度当然、だから傍観していた、とする心理が感じられる。こうした子どもたちの人間観の歪みは、子どもの成長を健やかなものにしてこられなかった社会の責任として問われよう。おとなとして、気の重い思いがある。

表12 いじめられた子の理由

数字は実数、( )内は%

|              | 小学校        | 中学校        |
|--------------|------------|------------|
| 弱点や性格的特徴があった | 157 (74.1) | 161 (73.5) |
| 思い当たらない      | 23 (10.8)  | 27 (12.3)  |
| 威張っていた子への反感  | 19 (9.0)   | 24 (11.0)  |
| 成績がよい子への妬み   | 13 (6.1)   | 7 (3.2)    |

## 5. 「いじめ」の終結と現在への影響

最後に「いじめ」はなぜ終わったか。終結の原因を聞いたのが、表13である。「卒業」「クラス替え」「転校」の合計が、小学校時代49%、中学校時代59%に対し、「教師の働きかけ」「学級会で取り上げた」の合計は、小学校時代20%、中学校時代12%と低い。学級会も教師の力量と考えれば、いじめを終結さ

せるには、残念ながら小・中学校時代とも教師の力より、「卒業」「クラス替え」「転校」など、特定の集団からの解放の方が効果的だといえる。また「卒業」「クラス替え」「転校」の合計は、小学校時代49%、中学校時代59%と、中学校時代の方が高く、「教師の働きかけ」「学級会で取り上げた」「友人の働き

表13 いじめ終結の原因

数字は実数、( )内は%

|           | 小学校        | 中学校        |
|-----------|------------|------------|
| 卒業        | 108 (35.7) | 109 (39.3) |
| クラス替え     | 27 (8.9)   | 44 (15.8)  |
| 転校        | 14 (4.6)   | 12 (4.3)   |
| 教師の働きかけ   | 41 (13.5)  | 26 (9.4)   |
| 学級会で取り上げた | 20 (6.6)   | 7 (2.5)    |
| 友人の働きかけ   | 19 (6.3)   | 12 (4.3)   |
| 本人の力      | 18 (5.9)   | 18 (6.5)   |
| 親の働きかけ    | 10 (3.3)   | 7 (2.5)    |
| 次のターゲットへ  | 20 (6.6)   | 7 (2.5)    |
| その他       | 26 (8.6)   | 36 (12.9)  |



かけ」「親の働きかけ」の合計は、小学校時代30%、中学校時代19%と、中学校時代の方が低い。

つまり、誰か周囲の人間が関与して終結したケースは、中学校時代より小学校時代の方が多少ではあるが高いという数値である。また「次のターゲットへ移ったので」は、小学校時代7%、中学校時代3%で、小学校時代の方が「遊び」型の「いじめ」が多く、ターゲットが固定している中学校時代のいじめの方が、より深刻であることもわかる。

表14は、いじめられていた被害者に、いじ

めが現在の自分にどんな影響を残しているかについて聞いたものである。その仕打ちが残って「まだマイナス」と答えた者が、小学校時代16%、中学校時代21%と、現在にいたってもしこりを残しているケースもある。同様のことは次の表15の、当時のことがトラウマ（心理的外傷）で、いまだに「クラス会へ出たくない気持ち」があるにも表れている。「絶対出席したくない」「できれば出席したくない」の合計が、小学校時代14%、中学校時代10%と、いじめが残したものの大きさがわかる。

表14 「いじめ」が残したものの(いじめられた子について)

数字は実数、( )内は%

|           | 小学校       | 中学校       |
|-----------|-----------|-----------|
| まだマイナス    | 13 (16.3) | 9 (20.9)  |
| マイナスもプラスも | 17 (21.3) | 9 (20.9)  |
| 何もない      | 26 (32.4) | 16 (37.3) |
| むしろプラス    | 24 (30.0) | 9 (20.9)  |

表15 クラス会へ出たくない気持ち(いじめが残したものの)

数字は実数、( )内は%

|                    | 小学校        | 中学校        |
|--------------------|------------|------------|
| 絶対出席したくない          | 15 (6.2)   | 11 (5.8)   |
| できれば出席したくない        | 18 (7.4)   | 7 (3.7)    |
| 少しこだわりがあるが、出席してもいい | 84 (34.7)  | 25 (13.1)  |
| 全く平気               | 125 (51.7) | 148 (77.4) |

また、最後の設問「いじめはなくせるか」では、実に70%の者が「なくせない」と答えている（表16）。確かに、いじめ問題が騒がれて久しいが、事態が改善されている様子はない。学校も社会もほとんど「いじめ」に対応できていない。

このアンケート調査の結果から、大きく2つのことがいえそうである。1つは、小学校時代のいじめの方が、悪質なものが少ないということ。もう1つは、やはり小学校時代のいじめの方が、担任や親の目に届きやすいということである。これら2つのことから、「いじめ」は小学校時代の方が何らかの手を打ちやすく、おとなの対応すべき手だてがあるということがいえる。むろん温かく、安定感を得られるようなクラスづくりができれば、子どもは「いじめ」のような形の鬱憤晴らしをしないですむであろう。しかし大胆な提言かもしれないが、小・中学校といえども、クラスをあまり固定化しない学級経営の方式もその1つの策であろう。また、いじめが発生

したらクラス替えをしてしまうことも、乱暴だが有効な方法かもしれない。

いじめは中学校になると、悪質でおとなの目に届きづらくなっているともいえる。理不尽ないじめも増えている。何がそうさせているのか。その原因の方が問題であろう。思い出してみると、中学校時代にはいじめを生みやすい要素がたくさんある。その後の人生を決める受験勉強。そのためにつけられる偏差値。受験が気になり、思いきり遊べないもどかしさ。小学校とは違ったシビアな成績評価。気になる内申書。厳しい校則。お金は欲しいが、まだ許されないアルバイト。何となく認められない異性との交際。そして難しくなる友人関係などなど。これらのことが、多感な思春期と相まって過大なストレスになっていることは間違いない。そのはげ口が、弱点や性格的特徴を持つ者に向けられる。最後の設問の結果の通り、硬直した現在の学校や社会が続く限り、「いじめ」はなくせないであろう。

表16 いじめはなくせるか

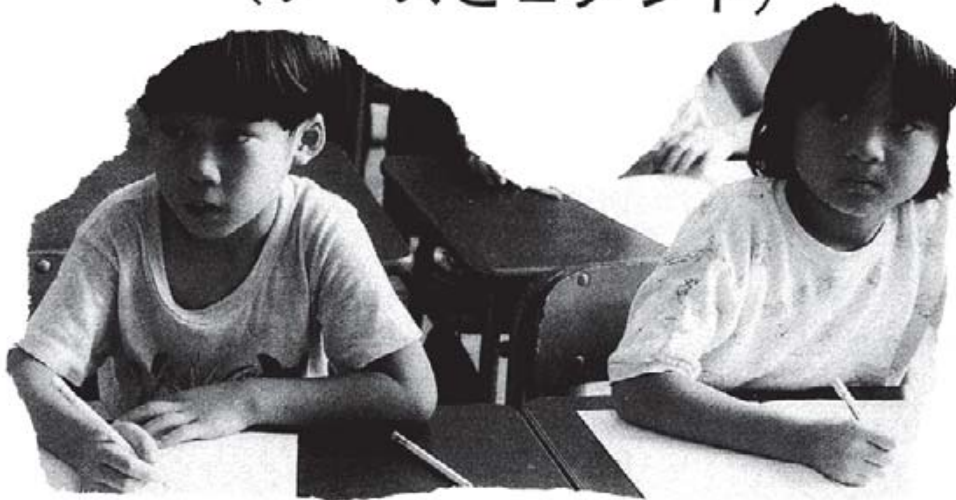
数字は実数、( )内は%

|       |           |
|-------|-----------|
| なくせる  | 4 ( 8.5)  |
| なくせない | 33 (70.2) |
| わからない | 10 (21.3) |

## 3章

# 面接のデータをもとに

(ケースとコメント)



パート

1

インタビュー／杉山和義（東京都立農産高等学校教諭）

### おとなしい子だったので

（女子）中学校の時、成績の悪い3人の男子からいじめられた。

自分は、暗くて、おとなしい、話し方が突っかかるようなタイプだった。容姿にも自信がなかった。自分の内面的問題だったから何をしてしても無駄。普通の子だったらいじめられなかっただろう（おとなしいのは普通でないこと）。自分がいなくなればよかったと思っていた。先生は、話を聞いてくれるだけでよかった。変に何かするよりは。親には、心配かけたくなかった。

自殺も考えた。2階の教室から飛び降りたかったが、死ぬ勇気がなかった。開きなおって、自分の存在が嫌なら、いること自体で邪魔になってやろうと思った。

そのうちに成績がよくなって、勉強という「よりどころ」ができた。先生が、詩をほめてくれた。認めてもらえてうれしかった。部活動で認めてくれる人が出てきて、自分の場ができた。

### 親や先生が取り上げると逆効果

（女子）小学校で、自分は女子のリーダー

だった。男子のリーダーとその取り巻きから、ライバル心でいじめられた。先生に日記で相談した。学級会で話題にされたが、かえって逆効果だった。親には、ぐちを聞いてもらって慰めてもらうことを求めているのに、保護者会で親がいじめられていることを発言し、逆効果だった。

なるべく気にしないで、萎縮しないように堂々としていた。心の中では、いつか見返してやるぞと思っていた。

**SQ. 最近自殺する子どもたちをどう思うか？**

死んだら仕返しできない。

### 支えてほしい

(男子) 小学校時代は、くそまじめ(友人に何かと注意する)、ガリ勉、先生に対してはよい子で、太っていて運動苦手。だからいじめられた。先生がキャッチして、クラスで「この中にいじている者がいる」と言ったが逆効果だった。親が何か行動すれば、「親に言いつけやがって」と、これまた逆効果だった。

先生は、アクションを起こすのではなくて、心からいじめられている子の相談にのってやってほしい。親も直接かかわらずに、子を支えてほしい。本当に相談できる友だちがほしかった。幸いにも励ましてくれて、よい面を認めてくれ、自分の存在価値を認めてくれた先生がいた。この先生がいなかったら、登校拒否か、学校をやめていただろう。

いじめから逃れるために自分を変えた。融通をきかせた。見て見ぬふり、一緒に悪ふざけもしたし、自分を主張しなくなった。中学校でも、小学校の時に張られたレッテルで、いじめられた。

**SQ. 最近自殺する子どもたちをどう思うか？**

学校にこだわる必要はない。相変わらず学校は、いじめに無関心。

自殺する勇気があったら、「けんか」「金属

バット」で対抗すればいい。

学校外に気軽に相談できるカウンセラーがいて、そこで他のいじめられている人と友だちになれたら、お互いに助け合えるかもしれない。

### 皆に知られなくなかった

(女子) 中3の時、自分は男子にうるさく注意していた。勉強ができて、目立っていたが、運動が苦手だった。だからいじめられた。机の中や上履きに砂を入れられ、道具箱にクモを入れられた。そばへ行くと、「空気がまずい」「左側が寒い」と言われた。

担任は、初めて中3を持つ若い女性だった。先生に迷惑をかけなくなかった。嫌がらせは誰がしたのか、証拠もなかった。先生に言ったら、いじめをクラスに言いそうだった。みんなに、自分がいじめられていると思われなくなかった。

親に言ったら「そんなことぐらいで、くじけるな」と言われた。わかっていない。

自殺も考えた。それを言ったら、親友が泣いて止めてくれた。休み時間には、誰かそばにいてくれた。自分自身、ここで負けたら悔しいと思った。

### コトを大きくしなくなかった

(女子) 中学の部活動で、ランニングが遅い自分だった。朝練ぎりぎりに参加することが多く、部員からよそよそしい視線を感じた。先生に相談しても、コトが大きくなるだけで解決しないだろう。小さく納めたかった。

友だちに相談してすっきりした。聞いてもらうだけでよかった。

**SQ. 最近自殺する子どもたちをどう思うか？**

子どもは、何で自殺がいけないのか教わっていない。命の大切さを教わっていない。いじめられている者にとって生きることは苦しみであり、生きろと言うことは苦しめと言っ

ているようなもの。何で生まれてきたのか、目標がわかっていない。

### 放課後の話し合いで

(男子) リーダーシップをとったので、無視された。

先生の「〇〇をいじめるな」という注意は逆効果でしかない。

先生が放課後、男子だけ(本人も)を残して話し合いをして、効果があった。

友だちとグループを作って対抗したのも、効果があった。

### 面接を終えて

先の「いじめに関するアンケート」の最後に、もしよければ、インタビューに応じてもらえるかどうかについて尋ねてある。「いい」と答えてくれた学生の中から、いじめられた経験を持つ人を選んでインタビューを試みた(なお本サンプルは、国立大学の学生のみである)。6ケースではあるが、インタビューの内容を考えれば決して少なくはない数である。なぜなら、いじめられたという、他人には決して話したくない経験を話してもらうのだから。

全員に、次のようなことを中心に質問をした。いじめられた原因は何だったと思うか。

誰にいじめられたか。先生や親、友だちに相談したか。その結果どうなったか。誰にどうしてほしかったか。自殺は考えたか。考えたのなら、なぜとどまることができたのか。最近の自殺する子どもたちをどう思うか。

いじめられた原因で、全員に共通していることは、「みんなと一緒に、横並び」ではなかったということだろう。その中でも今回の調査では、「勉強ができ、クラスでリーダー的存在だったために、いじめられた」と答えた者が6ケース中4ケースもあった。むしろ本サンプルが、大学に入学してきた層だったためかもしれないが。



また、「おとなしいことは、普通でないこと」とする意見も印象的だった。いじめられていることを、先生や親に相談しなかったケースも多かった。先生に相談しなかった理由として「いじめをクラスに言いそうだったから」「コトが大きくなるだけで解決しないだろうから」「自分の内面的問題だったから」など、先生が頼りにされていない意見が目立った。先生がいじめに気がついて「この中にいじめている者がいる」や「〇〇をいじめな」あるいは「先生に日記で相談したら学級会で話題にされた」などは、対応が悪く逆効果だとも言っている。親に相談した結果も同様で、「保護者会でいじめられていることを発言した」「そんなことぐらいでくじけるな」など、いじめられている子どもの気持ちや立場を全く理解していない。心配をかけたくないとして、先生や親に相談しなかった者もいた。先生や親、友だちに求めることとして、「心から相談のってほしい」「話を聞いてくれるだけでいい」をあげる者が多かった。いじめている側に何か働きかけをすることは、全く望んでいない。下手な働きかけは、事態を悪化させるだけとも言っている。中には、「本当に相談できる友だちがほしかった」と友だちに恵まれなかった者もいた。

自殺を考えたことがある者が、2人もいたことには驚いた。自殺をとどまった理由として、1人は「死ぬ勇気がなかった。開きなおって、自分の存在が嫌なら、いること自体で邪魔になってやろうと思った」。もう1人は「親友が泣いて止めてくれた。休み時間には、誰かそばにいてくれた。自分自身、ここで負けたら悔しいと思った」と、残念ながら先生や親の存在はあがらなかった。しかし、このインタビューに答えてくれた6人の中には、先生がいたからがんばれたとする者もいた。「先生が詩をほめてくれた。認めてもらえてうれしかった」「励ましてくれて、よい面を認めてくれ、自分の存在価値を認めてくれた先生がいた。この先生がいなかったら、登校拒否か学校をやめていただろう」などは、

先生の存在の大きさを物語っている。

最後の「最近自殺する子どもたちをどう思うか」の質問でも、大変興味深い意見が聞けた。「死んだら仕返してできない」「自殺する勇気があったら、『けんか』『金属バット』で対抗すればいい」など、いじめに立ち向かうべきだとするもの。「学校にこだわる必要はない」「相変わらず学校はいじめに無関心」のように学校のあり方を問うもの。「子どもは、何で自殺がいけないのか教わっていない」「命の大切さを教わっていない」「何で生まれてきたのか、目標がわかっていない」「いじめられている者にとって、生きることは苦しみであり、生きろと言うことは苦しめと言っているようなもの」と学校や親を含め、今の社会を批判するものなど、考えさせられる意見があった。

先に述べたように、このインタビューに答えてくれた全員は、大学に合格した、ある意味では受験においては「成功者」である。広く見渡せば、いじめによって登校拒否や進路変更などを余儀なくされた者も数多くいる。いじめが原因で自らの命を絶った者がいることも事実である。この調査の結果が、全てのケースにあてはまるわけでは当然ない。しかし、いくつかの貴重な意見には、耳を傾ける必要がある。

1つは、子どもたちの存在価値を認めてやることの大切さである。改めて、勉強でも運動でも、どんなことでもよいから、取り上げてほめ、その子を認めてやることの大切さである。もう1つは、子どもたちの話を丹念に聞いてやることの大切さである。ただ聞けばいいのではない。全ての教師が、子どもたちの心のひだを常に感じとれるぐらい敏感である必要がある。それを友だちに求めるには無理がある。やはり、先生や親に求められていると思う。子どもたちに信頼され、頼りにされる先生や親でなければならない。当たり前のことのようにあるが、今回の調査の結果では残念ながら、親も教師もそうではなかった。

## パート

## 2

インタビュー／遠田瑞穂（群馬女子短期大学専任講師）

## 遊び感覚で

（女子）中1の時だった。私の中学は1学年6クラスで、担任は毎年変わった。普通は1年から2年になるときにしか、クラス替えはない。しかしこの学年は、2年から3年になるときにクラスが替わった。今思うと、このいじめがあったからかもしれない。

中学1年5月から中学1年の3月くらいまで、この「いじめ」は続いた。いじめられた女の子は、友だちもいなかった様子で、話しかけたときの反応も目に落ち着きがないなど、普通の子ではなかった。何か違う子という印象だった。それを理由にからかわれていたのが、エスカレートしていった感じ。クラス全員からいじめられていた。

とくに「いじめ」のリーダーがいたわけではなく、仲がよいと評判の高いクラスだったが、クラス全員がその子を攻撃していた。からかっては、反応を面白がっていた。無視するよりも、話しかけたりして反応を面白がるパターンが多かった。嫌な仕事、例えば委員会で大変な仕事を押しつけられたり、放課後に、教室でスカートを照る照る坊主のように、頭の上で縛られたりして遊ばれていた。

他のクラスの子は「そこまでするとかわいそうだね」と言っていた。いじている方がいじめられる方を見下しているように感じた。

その当時、かわいそうだとは思ったが、いじめられている本人が「いや」ときちんと言えればいいのと思った。しかし変わった子で、その子にも原因があることを思うと、仕方ないのかなとも思っていた。いじている子も特別悪い子ではなく普通の子だったし、いじ

めと感じないで、遊びの感覚だったかもしれないが、他からみると「いじめでは」と感じた。中には「その子だからいいや」という子もいた。そのクラスの友だちと話をしていたときに「やめなよ」と言ったこともあったが、気にとめてもらえなかった。他のクラスのことだから、自分にその波紋が来ることはないと思ったし、いじめの集団の人数が多かったのも、それ以上、止めようとは思わなかった。担任の先生も、生徒からバカにされていて、いじめられていた。先生も注意したとは思いますが、言っても効き目はなかったと思う。

いじめが終わったのは、クラス替えで。廊下などで会って、やじをとばされることくらいは、その後もあったかもしれない。

## 性格の悪い転校生の子に

（女子）小学校は、1学年2クラスしかない小規模校。小学校4年2学期から、小学校6年3月まで、「いじめ」があった。

いじめられた子は転校してきた子で、転校してくる前に先生が養女である事情をクラスで話し、皆事情を知っていた。その子は「顔もかわいい、スタイルもよい、しかし性格が悪い」というタイプで、男の子には好かれそうだけれども、女の子には嫌われるタイプだった。嘘つきで、聞けばばれてしまうような嘘をつき、それで友だちを増やそうという感じの子だった。面倒見のいいやさしい子に対して、親しくなると態度が急に変わり、用事をやらせたりしていた。先生も養女ということで、ひいきしているのがよくわかった。その子が何かをすると「養女だからね」と

言っていた。

最初のうちは「嘘つくのはやめなよ」とか言ったりしていたが、変わらなかった。そのうちに許せなくなり、いじめが始まった。悪口、集団での無視、靴の中に泥を入れるなどした。

クラスの一部の女子（20人くらい）がいじめていた。他のクラスの子は、かかわらなかった。いじめられていた子の性格が悪くても自分に何もしなければ、関係なかったからだと思ふ。だれが中心ということはなく、悪口を言っているうちに、なんとなくいじめ集団ができていった。どちらかという元気の良い子たちが参加していた。

訳もなくいじめられていたのではなく、性格が悪いという理由があった。同じ時期に転校してきた子はクラスになじんでいたのだから。

その当時、その子だけ特別なのが許せなかった。最初は仲よくしていたのだが本心がみえてきて、意地悪で嫌な子だと思っていた。何かされても反省の様子もない。「何でそんなことをするの」と怒り口調で言って注意し

ても、効き目がない。中学校2年か3年の時に実の親元に転校していったが、いざ転校してしまうと皆「いなくなって寂しいね」とか言っていた。いじめているうちに、だんだん「そういう人もいていいのではないか」とも思うようになっていた。

### ただ単に標的にされていた

(女子) 1学年4クラスの中学校だった。3つの小学校が一緒になり、1つの中学校となる。クラス替えは1年ごとで、いじめられた男子の担任は、その部活動の顧問だった。中学校2年から3年にかけてのいじめだった。

その子は家でよく妹と遊んでいるやさしい性格で、頼まれると嫌と言えない子で、体も小さかった。絶対に怒らない。クラスでも部活動でも、嫌われるようなタイプの子ではなかった。中2の時、乱暴な男の子と同じクラスになった。クラスでは、その男の子を中心とした5人グループにいじめられていたらしい。部活動では、男子の先輩から、ただ単に標的にされていた感じだった。ある先輩が先





生に怒られたりすると、その先輩は腹いせに、その子にプロレスの技をかけ、逆さまにしてつり上げてそのまま手を離す、頭から水をかける、使い走りなどをさせていた。部活動に先生が会議などで来ないときには、とくにひどかった。

とうとう中2の3月頃から部活動に来なくなり、それから学校にも来なくなった。自律神経失調症で、自宅で療養しているということだった。部活動にその子が来なくなって、先生は初めて気づいたらしい。担任の先生がその子の家に行くと、「よくなったら、また吹きたい(楽器)」と言っていたらしいが、結局その後は、学校にも部活動にも来なくなった。

当時ひどいと思ってはいたが、先輩はこわかったので、言いたかったが何も言えなかった。先輩たちが引退してから部活動で話し合いがあり、そのときになってやっと「部活動をよくしたいなら、いじめるのをやめて」と言うことができた。私はなるべくいじめられていた子とも、仲よくするように心がけた。

今、振り返ってみると、いじめは終わっても、彼が元気にならなかったことを考えると彼はかなりひどいダメージを受けたのだと思う。親や妹にもずっと言えなくて、1人で悩んでいたらしい。乱暴な男の子と先日会う機会があったので、なぜ、あんなことをしたのか聞いた。「理由はないけれど面白かった」と言っていた。なんだか、気が抜けてしまった。

しかし、いじめられる子はどこか精神的に弱いのではないか。自分から話しかけられなかったり、いじめられても何も言うことができない。それで暗くなってしまう、余計に孤立し、さらにいじめられるのではないか。

### 仲よしの子のお金を盗んで

(女子) 中学校3年2学期から卒業までのいじめ。クラスに以前から少し浮いている女の子がいた。体育祭の衣装を作るために、彼

女も私たちと一緒に同じグループの子の家に泊まったが、そのときに彼女がグループの友だちのお金を取った。初めはお金を取られた子を含むグループが中心となって無視していたが、話はすぐクラスに伝わり、クラス中に無視するムードが広がっていった。そして、ほとんどクラス全員から無視されるようになった。

彼女はクラスの子とは接触しなくなり、クラスから次第に逃げていった。だんだん学校に来なくなり、たまに学校に来て、保健室にいた。

先生はクラス全員に、ホームルームでそのことについて指導をした。いじめられた子に対しては家庭訪問をしたりしていた様子だったが、これははっきりしない。先生は、もう卒業が近かったのであきらめている感じがした。卒業で皆、ばらばらになって終わった。

当時、いじめられた子もお金を取ったという悪いことをしてしまったから仕方がないけれども、無視をするのではなく、きちんと話し合いをした方がよかったと思っていた。同じような考え方の人も何人かいたと思う。しかし、まわりの目が気になって動けなかった。

最近の「いじめ」は、いじめられた側には責任がないと思う。皆、同じにさせられてしまっていて、それによるストレスがいじめの原因になっていると思う。少しでも他人と違うといじめにあってしまう。

### 担任の態度といじめ

(女子) 1学年3クラスの小学校で、担任は毎年変わっていた。

自分が5年で転校してきたときに、ある男の子がいじめられており、卒業まで続いた。転校してから、同じクラスの子に口々に「あいつには気をつけろ」と注意され、なんとなく雰囲気飲み込まれていった。だいぶ前から続いていた気がする。いじめられた子は外見が少し変わっていたが、話すとき普通の男の子だった。

クラス全員が、その男の子を仲間外れにしていた。とくに男の子の中でも比較的、元気の良い子が「(近くに)くるなよ」などと言っていた。しかし、そのいじめられた子は言われても笑っていて、気にしていない様子だった。

5年の時の若い女の担任は皆に軽く注意をしたりしたが、6年の時の男の担任は、その子を皆の前でバカにしたり、軽蔑したりしているように思えた。教科書にひどい文章があったりすると、その文章にその子の名前をあてはめて読んだり。先生自らが、いじめに参加していたように思えた。このいじめは卒業まで続いた。

転校してくる前の学校では、何もなかった。転校先の学校は、農家がたくさんあり、閉鎖的だった。自分の世界に入ってしまった子が多く、標的を見つけるとまわりを気にせず、それに向かっていってしまう感じだった。いじめられていた子は、べつに悪い人ではなかったし、もっと歩み寄ればよかった。でも私も友だちを作らなくてはいけなかったし、友人の言葉をうのみにしてしまった。今考えると、ひどいことをしていたと思う。

### 被虐待児が、クラスでも

(女子) 中学は3つの小学校から集まる中学校で、1学年9クラスという大規模校だった。毎年クラス替えがあり、担任も毎年変わった。3年3学期の、もう進路が決まりはじめていた頃から、卒業まで続いたいじめだった。

仲のよい10人グループのうちの1人の子のお父さんは、暴力をふるうらしく体にあざがあったりした。それをその子は仲よしの仲間に見せたり、わいわいやっているときに突然泣いたりした。「どうしたの?」と聞くと「なんでもないの」と答える。自分を大きく見せたい感じで、見栄っぱりでわがまま。「どうしたの?」と聞かれ、皆にあわれんでほしかった感じがしていた。不幸な少女を自分だけで演じていたような感じもした。そのようなこ

とを繰り返しているうちに仲間が怒りはじめ、9人からの無視が始まった。

クラスの他の女子は勉強熱心で見ても見ぬふり。自分たちには関係ないという感じだった。男子は全く無関係。男子の中にはこのいじめられた子と交際している子がいた。

無視に関しては、本人はあまり気にしていない様子だった。もう卒業が近かったためかもしれない。しばらくして1週間くらい学校を休んだことがあった。仲間で「無視が原因かも」ということになり、担任の先生に話した。先生との話し合いで、それから表面上は話をするようになったが、陰では悪口を言っていた。「あいつが心をいれかえるまで許さない」という気持ちだった。同じ高校に進んだが、高校ではとくに目につかなかった。

### かん黙傾向のある男の子

(女子) 小学校6年生のクラスの男の子。はじめからおとなしい子で、同じグループ(5~6人)の人とは話をするが、他の人が話しかけても答えないので、何となく話しかけづらくなってきて、グループ外の人が皆無視をするようになった。もっと直接的な原因があるかもしれないが、私にはわからなかった。次第に同じグループ(5~6人)の人も無視しだしたのかははっきりしないが、そのうちに学校に来なくなってしまった。

本人が向こうから話をしてくれれば、話したと思う。他の人もそのいじめられた子に話しかける雰囲気ではなかった。先生も気づいていたし、いじめられた子のお母さんが学校についてきたこともあった。そのうちに「勉強を教えにいてあげよう」ということになり、他のグループの子で、クラスでも活発な子が何人か、その子の家に行ったこともあった。

### 「悪口を言っている」と人づてに聞いて

(女子) 中学校3年の7月から中学校3年の

3月まで。5～6人の仲よしグループがあり、そのうちの中心的存在だった子が、自分の仲よしグループの悪口を言っていると人づてに聞いて、グループ内で無視するようになった。それが広がって、クラスの女子全員が無視。あいさつもしない。その子が近づいてくるとどこかへ行ってしまったりして、全く行動を共にしない。とにかく近くにいないという状態だった。男子は気づいていたがかかわらず、私はまわりの雰囲気飲み込まれていった気がする。あんなに仲がよかったのに、どうして悪口を言うのかとがっかりした。

それからは、人間関係について冷めた考え方をするようになり、仲がよくなっても相手を信じきれないところがあるようになった。先生たちは、わかっていなかっただろう。今振り返って、本当に悪口を言ったかどうか確かめるべきだった。直接、本人から聞いたわけではないので疑問なのに。後悔している。

### いじめから不登校、非行に

(女子) 小学校4、5年生の頃、クラスの中にどこか変わっている女の子がいて、身体的

欠陥があった。シラミ検査があったときに、シラミがいたという噂が広がった。初めからクラスで浮いていたが、だんだんクラスの皆が無視するようになっていった。学校も休みがちになった。その子は中学に入り、だんだん非行に走るというか、はずれていった感じがする。

とくにその子が嫌ではなかったし、そこにいるならいてもいいという感じだった。気にはかかっていたが、自分からいじめをやめるように言い出せなかった。でも自分から何回か話しかけにいったような気もする。迷惑をかけられる訳ではないし。

その子は先生に、いじめられていることを話したらしく、クラスの皆で家まで迎えにいったことがあった。でもみんな「面倒だな」と言っていた。中学校に入るとよく職員室にいた。唯一、先生が話せる相手だったのかもしれない。

卒業と共に終わったのではなくて、消えた。本当に消えたという感じ。あのとき、彼女自身が何を考えていたのかという思いがあり、気にかかる。



## 先生が全くとりあわず

(女子) 1学年3クラス、1～6年までクラス替えのない小学校だった。いつも一緒に帰るグループ(男4人、女2人)があったが、高学年になって、別々に帰るようになった。その後、男4人のグループのボスの存在の子が、そのグループの弱くて逆らわない子にカバンをもたせるようになり、それがエスカレートしていった。

このボスの子は、クラスでも恐れられていたので、クラスの他の男子は、「いじめ」に関して知らないふりをしていた。女の子が先生に、「いじめ」のことを言い、先生は男の子に確かめたが、「遊んでいるだけ」と答えた。ボスがこわいので、男の子はみんな「知らない」とか「遊んでいるだけ」と答えた。それなら問題はないということになる。以上の繰り返しだったとのことだ。カバンを持たせることから、殴る、蹴るというような暴力的ないじめに変わっていき、体にはあざができていた。先生にばれないように、木の陰などで殴ったりしていた。

6年になりターゲットが一時、2人になったが、新しくいじめられるようになった子がはっきり断ったら、その断った子にはそれ以来、何もしなかった。いじめられた子は、クラスの男の子と交流のある方ではなかったが、女の子とは口げんかもする、普通の子だった。女の子たちは、いじめた子にやめるように言ったが、個人的に言っても効果がなかった。なので、いじめをやめさせる相談をしたりしたが、学級会でもいじめのことを訴えたりしたが、先生が全く取り合ってくれなかった。先生は本当に「関係ない」という感じだった。先生に対し「何で」という不信感でいっぱいだった。

卒業してバラバラになったので、「いじめ」そのものは消えてしまったが、先生への不満が残っている。中学に進学してから、いじめていたボスの存在の子は、学校に来なくなってしまった。最初は小学校の頃とは違う部下を引き連れていたが、夏休みくらいから

来なくなった。高校も中退してしまった。

主にいじめは学校帰りの通学路で行われた。

## 可愛くて目立つ子が不良グループから

(女子) 中2の時だったが、なぜいじめられたのか、いまだにわからない。その子は確かに可愛くて服装も派手だったので、学校でも目立っていた子だった。同じ学年の同クラス、違うクラスからなる5、6人の不良グループにずっと目をつけられ、狙われたらしい。不良グループの中には、姉妹で不良として有名だった子も含まれていた。トイレに呼びだされて、髪を切られたりした。

その子と友だちだったので助けたかったが、こわくて逆らえないし、何もできなかった。先生に言っているのかどうか本当に迷ったが、言えなかった。チクったと言われるし。小学校の時に先生が知らん顔だったので、言っても無駄という思いもあった。このことを担任の先生は気づいていなかったのではないと思う。いじめられた子が服装などを改めたせいか、いじめた方が次第に普通に接するようになっていった。

しかし、いまだにいじめた子が許せない。いじめられた子は同窓会にも来ない。卒業式の後もすぐに帰ってしまった。いじめた子はただ単に自分を不良に見せたいがために、いじめた気がする。同級生のいじめは長く続く傾向があるのではないだろうか。

## 折角ランクの高い高校に合格したのに

(女子) 人に逆らわない静かな男の子で、中2から卒業まで、いじめられていた。気づいたときには、もうすでにいじめられていたので、きっかけはわからない。中心は3人程度だが、クラスのほとんどの男子が雰囲気飲み込まれていた。中心の3人は、勉強はできる方ではなかった。本当に乱暴な性格だった。修学旅行の時、プロレスごっこをしていて、その子は救急車で運ばれた。男子は「死んで



しまえばよかった」と言っていた。その子は授業中も椅子で殴られたりしていた。暴力、言葉によるいじめだった。

見ているのも切なかったが、かと言って、こわくて何もできなかった。先生方は修学旅行の事件で、初めて気づいたようだった。担任は理科の先生で、ほとんど教室には来ず、理科研究室にいたし、同じクラスに不登校の子がいたので、その生徒にかかりっきりだった。他のクラスの先生は、自分のクラスにもいじめがあったので、自分のクラスで精一杯だったようだ。いじめられた子といじめた子は同じ公立高校に受かったが、いじめられた子は私立高校に進学した。この地域では公立高校の方がランクが上なのに。親は「いじめ」を心配していたのではないか。仲間も何もできなかった。

何もできなかったということは、自分もいじめていたことになるかと思うと心が痛む。

### 手紙でいじめられて、自殺も考えた

(女子) 入学した4月から新しい中学校ができる予定だったが、予定が遅れていて、他の中学校の校舎の一部を借りて授業をしていた。6月頃にきちんと分かれた。1学年100人程度、小学校と全く同じメンバーだった。いじめは入学してすぐ始まったが、一方的だったのできっかけはわからない。入学式の時、新入生代表として、自分がステージであいさつの言葉を読んだのでいじめられたのかもしれない。

手紙による嫌がらせだったから、誰がやったのか見当がつかなかった。友だちの靴箱に手紙が入っていたらしく、「この手紙が入っていた」と言って渡された。「剣道部とバドミントン部には入らないで」という内容だった。入学した直後の学力試験の結果が返ってきたときにも、「テストできているからっていい顔しないで」という手紙がきて、その後も、何通か家にも送られてきた。

とうとう親に話して、親が学校の先生に話した。友だちには話さなかった。先生は、親が連絡して初めて知ったようだった。朝礼の時に校長先生から注意があり、それ以来、手紙は来なくなった。先生はいろいろ調べ、誰がやっていたのかわかっていたらしいが、教えてはくれなかった。

当時はいじめた子は絶対に同学年ではないと信じていた。言いたいことがあるなら、はっきり言ってほしかった。先生は筆跡やその他から誰だか知っていたようだったが、聞いても教えてくれなかった。卒業する時までに絶対、名前を聞いて仕返しをしてやろうと思っていた。いっそのこと死んでしまった方が相手が傷つくだろうし、思い知らせてやる、気持ちをわからせてやるという気持ちで死んでしまうことも考えたりした。毎日、家で泣いていた。

今思うのは、もっとあのとき強くて、逆に「いじめてやる」くらいの気持ちが持てたな

らと思う。今も「誰だったかな」と思うが、あのときは、聞かなくてよかった気がする。もし同級生だったならショックだったと思うから。

### ■ あこがれの先輩と仲よくして、妬まれた

(女子) 1学年6クラス、1年～3年までクラス替えなし、担任も変わらず、3つの小学校が集まっていた中学校だった。中1の時、仲のよい先輩がいた。その先輩の友だちで、学校でもアイドル的な存在の男の先輩と仲よくなった。そのため、中2の女の先輩5、6人にいじめられた。すれ違いざまに悪口を言われる。靴を隠される。呼び出されるなどだった。アイドル的な先輩と仲がよかったということで、「仕方がない」という気持ちと「バカみたい」という冷めた気持ちと半々だった。3年生が卒業し、アイドル的な先輩がいなくなったので終わった。

## ■ 面接を終えて

「いじめ」というと、被害者、加害者が注目されがちであるが、ここでは傍観者またはそれに近い層が、いじめの渦中にいて、どのようなことを考えていたのかを見してみる。

①まず、中学校1年の時に、隣のクラスでいじめがあったというケースで、本人は、いじめられた女の子の印象を、「普通の子でなく、何か違う子という印象だった」と語っている。友人がからかって反応を面白がる、嫌な仕事を押しつけたりするなどのいじめを目撃し「かわいそうだとは思ったけれども、その子にも原因があることを思うと仕方がないのかなと思っていた」と言っている。いじめられた人にもそれなりの理由があるとすることで、いじめを正当化しているケースである。さらに「自分にその波紋が来ることはないと思った」とも話しており、「自分さえよければ」という現代っ子の人間関係の希薄さが見

えている。

②次はいじめの渦中にいながら、その対応に迷っていたケースである。

中学校の時に、同級生が部活動の先輩にいじめられていた頃を振り返り、「ひどいとは思ってはいたが、先輩がこわかったので、言いたかったが何も言えなかった。先輩たちが引退してから、やっといじめをやめるように言うことができた」と語っている。いじめられた子は自律神経失調症となり、学校にも部活動にも復帰できなかったようで、「彼が元気にならなかったことを考えると、かなりひどいダメージを受けていたのだと思う。誰にも相談できなくて1人で悩んでいたらしい」とのことを、今も忘れられないと語っていたのが印象的だった。

次も中学校のケースで、仲がよかった友だちが、たまたま少し目立っていたことを理由

に同学年の子からいじめを受けた。その当時の心境を「その子と友だちだったので助けたかったが、不良グループのメンバーがこわくて逆らえないし、何もできなかった。先生に言っているのかどうか、本当に迷ったが、言えなかった」と語っている。また「小学校の時の先生がいじめに知らん顔だったので、言っても無駄という思いもあった」という。

さらに小学校5年生の時に転校したばかりでいじめに巻き込まれたケースでは、新しいクラスの子に口々に「あいつには気をつける」と注意され、なんとなく雰囲気飲み込まれてしまったらしく、そのようないじめを振り返り、「いじめられた子はべつに悪い人ではなかったし、もっと歩みよればよかった。でも私も友だちを作らなくてはいけなかったし、友人の言葉をうのみにしてしまった」と語っている。

その他のケースでも「まわりの目が気になって動けなかった」や「見ているのも切なかったが、かと言ってこわくて何もできなかった」などといった、傍観者としての心境は複雑で、ただ無関心でいるのではないこともわかる。

以上をまとめてみると、「いじめ」を見て

いたとき、初めにあげた隣のクラスで「いじめ」があったケースのように、いじめられた人にも理由があるから仕方がないと「いじめ」をある意味で正当化しているものもあるが、どうにかしたいが、こわくて何もできないという、いじめられ不安のあるケースが目立つ。「いじめを止めたい。しかし、いじめを止めたならば、自分がいじめられてしまう」といういじめられ不安にさいなまれている心境を考えると、「いじめ」は被害者、加害者だけではなく、そのまわりの生徒にどう働きかけるかが対応のカギと思われる。

今いじめられていなくても、いつ自分がいじめられるかわからないといった、いじめられ不安におびえて学校生活を送っていた体験を見ていると、自分を守ることによって精一杯であり、「私には関係がない、私さえいじめられなければよい」という考えが出てきてもおかしくはないだろう。

ただ単に見て見ぬふりをして、いじめに消極的に参加しているとみなされる傍観者の悩み、さらには「いじめ」の中でどのように行動したらよいか迷っている現実を、教師がきちんと把握し、援助し、こうした傍観者層を適切な方向へ導くことが、いじめの対応に当たっての手がかりかと思われる。

**動作ののろい子にイライラして**

（女子）中学1年の1学期に、2か月間ぐらい女の子をいじめた。

その子は円形脱毛症で、その上動作がのろく、おとなしくてハキハキしていなかったから、班の子がイライラしていた。それが口コミで広がっていったのだと思う。

最初はクラスの人たちが、休み時間などにその子と話をしなくなり、そのうち大変な仕事を押しつけるようになった。グループを組むときにも皆嫌がって逃げてしまって、仲間外れにした。その子はいつも教室の隅にいて、皆から無視されていた。かわいそうと思いつつも、自分がしっかりしないから、その子本人がいけないのだと思っていた。クラス全員がそう思っていたので、皆、悪いことをしたとは思っていなかったと思う。だから先生に言われて気づくまで「いじめ」を止めなかったし、全員がかかわっていた。

先生がある日、その子に近くの文房具店に買い物に行かせ、留守の間に皆に説教をしたことがきっかけで、その後「いじめ」はなくなった。今思うと、その子には悪いことをしたと思っている。「いじめ」を止めないで、皆と同じ行動をとってしまった自分は、勇気がなかったと思っている。

**先生の説教とリーダーが殴って終わる**

（女子）中学2年の時、いじめられていた子はクラスの男の子で、おとなしくて、あまり怒ったりしない従順なタイプだった。いじめられているうちに成績もだんだん下がりはじ

めた。人前にでるとオドオドしたりビクビクするようになった。また話し方も吃るような感じになり、落ち着きを失っていった。

いじめ方は、容姿をバカにされたり、その子がさわった物を触らないなどの菌ごっこ。最初は口でのいじめだったが、そのうちプロレスごっこと称して殴ったり、蹴ったりした。使い走りをさせたり、みんなの前でズボンを下ろさせるなど、屈辱的な行為をさせた。

いじめた方は、その子と同じ部活動のリーダー格の男子。わがままで、自分の思い通りにならないと人に当たるタイプだったが、反面、自分より優位に立つ人間に対しては媚びるタイプ。いじめの原因は、その子の容姿のことだった。実際に清潔でなかったし、また嫌なことをされてもニヤニヤ笑っているので次第にエスカレートしていったのだと思う。最初いじめにあったとき、真剣に怒ったり、逆らったりすればよかったのだ。いじめっ子の方は、自分の欲求が満たされないと、不満のはけ口を見つけて他人に、精神的、肉体的攻撃を加えていた。自分より劣っていると思う人しかいじめなかった。

担任は、所属していた部活動の顧問もしていたが、気がつかなかったようだ。親から通報されて初めて知った。問題が大きくなってから、周囲も気がついた。しかし、それ以前にクラブの目につくところで「いじめ」が起きていたので、担任が気がついていないのはおかしいと思った。

3年の1学期まで「いじめ」が続いたが、母親が先生に通報し、先生がクラスの男子だけを残して説教をした。それと同時に隣のクラスのしっかりした男の子が、いじめていた



子を殴って「もういじめるな」と話したことで終わった。

当時の心境は、「またバカにしている」としか思わなかったが、だんだん「いじめ」が正面に出てきて「かわいそうだなあ」とは思った。しかしあまりにも日常化してしまい、「またやっている」ぐらいにしか思えなくなってしまうと、助けてあげることも先生に話してあげることもなく、完全に傍観者となってしまった。女の子は、1人ではどうしてあげることもできないと思った。その子が好きなのだと誤解されそうだから。

今、振り返ってみると、すごくかわいそうなことをしたと思うし、後味の悪い思い出となっている。当時はこんなにひどいことになっているとは思っていなかったの、なおさら冷たいことをしたと思う。女子が団結して、誰かおとなや先生に話せばよかった。

### いじめで転校してきた子に再度のいじめ

(女子) 小学校6年生の4月から卒業まで続いた「いじめ」。4月に転校してきた子で、前の学校でもいじめられていて、それに耐えかねて転校してきたらしい。「自分はいじめられていたので、これからもしじめられたらどうしよう」とばかり言っていた。それにつけこんだクラスの男子が「いじめ」のきっかけを作った。その子はいじいじしていて消極的、「いじめ」をとでも恐れていた。からかいから始まり、嫌がることを言ったり、足を引っ掛けたり、おかしい子だと言ったりして、いつも泣かせていた。男の子全員がそれにかかわっていた。

男子はいじめに加わったが、女子は何もしなかった。その子はまるで「自分は、いじめられるしか方法はないんだ」という態度だったが、ときどき先生には話していたり、助けてもらっていたようだ。先生は少し助言をするぐらいで、何ら効き目はなかった。こうした状態は卒業まで続いた。さらに公立中学に進学しても続き、その子は再び転校してし

まった。

その当時の心境は、前の学校でいじめられていたなら、その原因を直して、新しい学校では気分も新たに生活すればよいのに、「いじめ」にこだわっていたので、何かしてあげようとは、あまり思わなかった。女子も見えて見ぬふりをしていた。その子はなんで助けてくれないのかと思ったかもしれないが、いじめられる方にも原因があると思う。

今、振り返ってみると、女子も無言のいじめをしていたと思う。声をかけてあげなかったことが悔やまれる。しかし、その子も転校先で、前の学校のいじめのことを引きずっていたからよくなかった。友だちを作れるように努力すれば、こうはならなかったと思う。私だったら前のいじめのことなど言わない。

### ワンマン型的女子リーダーに指示されて

(女子) 小学校5、6年の時に、クラスの女子を仕切っている女の子が、弱い女の子をのけ者にした。

初期は、仲間外れにするような感じから始まり、その後は無視、そしてクラスの他の女の子にもそうするように強要した。いじめられた子は、弱さと甘えん坊のところがあり、その甘えがわがままにつながり、集団の中で浮いていた。先生もあまり重くみていなかったようで、それについて特別なことはしなかった。クラス全体もどうしようもないという雰囲気だった。最終的にはリーダー格の子といじめられていた子の間では、ほとんど口をきくことなく卒業した。また、いじめられた子はごく親しい人としか話をしなくなってしまったが、その状態のまま、卒業してしまった。

いじめっ子は勝気な性格で、自分がリーダーでいたいという気持ちが強く、皆はその子の言うことを聞かないと、何をされるかわからないというこわさもあった。しかし私は、いじめられていた子と友だちだったので、目に見えないところで何かと味方になって、か

ばってあげた。そのためリーダーの命令で、私も多少、他の友だちから無視されるという一時期もあった。私はそのリーダーの子と思いきり口げんかをして、仲直りをした。

しかし今、振り返ってみると、私がもう少し何とかしてあげられたのではないかと思える。両者の間に入って話すきっかけを作るなど、なぜそのとき、考えられなかったのか残念。その気持ちがあれば、決して難しいことではないと思う。とくにいじめられた子は私の友だちだったのだから。

### ■ 自分がいじめられていた

(女子) 5年生の時にクラス替えがあり、わりと仲よしだったグループ4、5人が、また一緒にクラスになった。いじめられたきっかけは、グループの1人の可愛らしい髪型を私が真似をしたこと。その後は話しかけても無視されたり、わざと聞こえるように嫌なことを言われたり、顔を見てヒソヒソ話をしてニヤニヤしたり嫌がらせが1年くらい続いた。私はいつも一人ぼっちでした。

原因は私にあった。でもものを言えば、余計にいじめられると思い、黙って耐えた。毎日が真っ暗だった。でも学校を休むと両親に心配をかけるので、学校には休まず行った。先生に知られるのが嫌だった。それで、「いじめ」を受けていないかのように、先生の前では、明るく、何もなかったようにふるまった。早く学校が終わればよいと思って、時間ばかり気にしていた。家に帰るのがうれしかった。

先生は、何にも気がついていないようだった。他の女の子たちは、「いじめ」を知っていたにもかかわらず、傍観していた。私は何も話さなかったで、両親も知らなかったし、私も感づかれないうようにして過ごした。私が耐えていたので、いじめる方がだんだん何もしなくなった。6年生の頃には終結して、私も明るく活発になり、学校も楽しくなっていた。この場合は自分に原因があったので、

がまんすることができた。

### ■ 反応がないからもっといじめてやろう

(男子) いじめがあったのは、小学校5年の1学期から中学校1年の終わりまでの3年間だった。きっかけはあまりはっきりしない。その男の子の父親は体が不自由で、生活保護を受けていた。母親は病気がちだった。

クラスの男子全員が「いじめ」に加わったが、いじめの中心になっていた子は、乱暴な子でこわかった。クラスの中でのいじめだが、トイレから帰ってくるのを待ち受けて性器を蹴ったり、黒板消しをドアの上にはさんで落としたりした。1年経って、その子は学校に来なくなってしまった。その後、少しは登校するようになったが、頭痛がすると言って途中で帰ることが多かった。相変わらず、からかったり、殴ったり蹴ったり暴力があったからだ。その子とは、中学になっても同じクラスになった。

笑うこともなく閉ざされた感じで、相手と目を合わせないし、自分から話そうともしなかった。こちらから話しかけても答えるだけ。適応性がなく、暗く、友だちの中に入っていけない。そんな子を見て、「何となくいたずらをしてやろう」的にいじめに入っていたという感じだった。そして反抗しないからつまらない、もっといじめてやろうということで、ますますエスカレートしていった。その子はやがて、盗みやシンナー、喫煙などをするようになった。そして、その子が非行に走ったのを見て、みんなこわくなっていじめを止めた。

当時、あんなことをされたら、誰でも学校には行かなくなってしまう。いじめられている度にかわいそうにとは思ったが、本人は黙っているし、つき合いづらいと言われて嫌がられているし、仕方がないと思っていた。

担任は24歳の女の先生で、困った様子をしていた。とても悩んでいた。しかしどうしてよいのかわからなかった様子だった。中学の

先生は、いじめよりもその子が非行に走ったので、その方面の指導になった。今思うと、家庭環境で人を差別したり、性格的なことでいじめたりしたのは、本当にかわいそうだったと思う。今だったら、決してこんなことはしなかったと思う。先生も困っていたが、対処の方法もあったと思う。そのままになってしまって、とても残念だ。

### 円形脱毛症、そして不登校に

(女子) 中学3年の時に、いじめられた男の子は、何でも一生懸命にやるタイプだった。生活すべてにわたってきちんとしていて、何でもできた優等生で、家に帰ってからも、塾に通ったり、おけいこごとをしていた。その彼がケガで3か月入院した。そしてその間にクラスの男子の間の人間関係が変わっていったように思う。退院後、彼と友だちとの人間関係がうまくいかなかったのが、いじめの原因だった。

「いじめ」の中心になったのは、クラスでリーダー的な男の子で、カバンの中に石を入

れたり、はやしたり、無視したりした。その子が何でもできるので、もともと妬まれていたのだろう。がんばっているいろいろなことをしているのが気に入らなくて、皆が「嫌がらせ」をしたのだと思う。リーダーの子は聞き分けがなく、自己中心で腕力が強く、みんなを束ねていた。男と女が20人ずつのクラスだったが、男の子はいじめに加わり、女の子はかわいそうと思っていたが、先生に話した2人以外は、見て見ぬふりをしていた。

かわいそうだし、その子はまわりから見ても、だんだん元気がなくなっていくので、女の友だちと2人で先生に話をした。先生は30代後半の男性。あまり取り合ってくれなくて、嫌な思いがした。当時は、先生に話すにも勇気が必要だった。「いじめ」は、ますますエスカレートしていった。そのうち本人は、円形脱毛症になり、鬱状態になってしまった。学校にも来なくなってしまった。そうなるとうと、みんな心配になった。

学校に来なくなってしまったとき、本人・担任の先生・親とで何回も話し合いが行われたらしい。専門のカウンセリングを受け、本



人は学校に来るようになった。クラスでも話し合いが行われ、終結した。

今、振り返ってみて、先生にもっと何回も話してあげればよかったと思う。本人も1人で悩まず、早いうちに両親や担任に相談すればよかったのと思う。

### 母親に気づかれて

(女子) 小学校4年の約半年間、5人グループで何をするのも一緒にしていたが、私があるとき、担任の先生(若い男の先生)と楽しく話しているのを見てから、何か先生に言いつけていると勘違いをしたのだと思う。それから「いじめ」が始まった。陰でコソコソ悪口を言われたり、約束をすっぽかされたり、わざと間違えて教えられたり、物を隠されたり、遊びにいく約束をしても当日断わられたりした。

物を盗まれたりしたこともあった。その他にも、いろいろと嫌な思いをさせられた。グループ内のことなので、クラスの人ほとんど知らなかったと思う。

毎日がつまらなくて、何とかならないかと思ひ悩み、勉強も手につかなかった。表面的にはいつも通りグループの仲間という態度だった。でも実際は仲間外れになっていたの、学校に行くのが嫌で嫌でたまらなかった。母親には話さなかったが、子どもの様子を「何か変だ」と思ったのだろう。すごいカンだと思った。聞かれて少し話したら、すぐ先生に相談に行った。その結果、私とグループの友だち、先生とで話し合いを持って終結した。

### いじめられて、ついに反撃

(女子) 5年生の時、顔にホクロがあって、それがおかしいと笑われ、それを私が無視をしたことから始まった。リーダーは、同じクラスの女の子で、前からあまり仲はよくなかった。4年の時にクラス替えがあって、その時から同じクラスになった。最初はからか

われる程度だったが、次第に「そのホクロ取ってあげる」といってぶたれた。教科書に落書きされたり、物を隠されたりした。自分から誰かに言うこともできずに、誰かが気づいてくれるのを待っていたような気がする。結局誰も気づいてくれず、孤独な気持ちでいた。

仲のよい友だちには話したので、友だちは先生に話してあげようかと言ったが、もっとひどくいじめられると思って「もう少し様子をみてるから」と断わった。「いじめ」は誰も見ていないところなので、他の人は知らなかっただろう。あるとき、ついに「これ以上、何かやったら、おばさんに言うわよ」と言ったらだんだん止めて、冬休み以後終結した。

当時はホクロを取る方法がないものかと真剣に考えた。そんなに見苦しいのかと思って悩んだ。今思えば、もっと早い時期に、はっきり反撃しておけばよかったと思う。

### 札付きのいじめっ子に団結して抗議

(女子) 中学1年の1年間で、相手のとった行動が気に入らなかったのがきっかけだった。いじめた子は、小学校からの評判のいじめっ子で、悪ふざけは日常茶飯事。いつも落ち着きがなく、先生にも親にも反抗的で、程度の差は種々だが、いじめや悪ふざけはクラスのほとんどの子が経験した。どちらかという小柄でおとなしい、気の弱い子がよくいじめられていた。笑ったと言ってはつかかかってきていじめた。気に入らないと、蹴ったりして泣かせる。何か「物」をこわしたと言っては、その品物の倍額を要求してくる。毎日、今日は誰が「いじめ」の対象になるのか、ヒヤヒヤしながら学校に行っていた。

先生は日頃から注意をしていたが、全くやめないなので、他の先生や、その子の家庭とも話し合っていた。

「いじめ」が終わったのは、クラスの皆が団結して抗議したら、人数的にかなわないので、おとなしくなったからだ。



### いい子ぶりっ子の「いじめ」に加わった

(女子) 小学校6年の時に1年間も続いた。いじめられた子は頭がよくて、優等生でおとなしいふりをしているが、すごくわがままで気が強い子だった。先生によく見せるためには、何でもするタイプ。ある子が寄り道したことを、先生に言いつけたことから始まった。すぐに先生に言いつけて「いい子ぶりっ子」をすることに対する反発だった。仲間外れ、無視など、クラス全員が参加していた。

かわいそうと思ったこともあるが、そうすれば「いい子ぶる」のは止めると思っていじめていた。「いい子ぶる」のを、なんとかしても止めさせたい一心だった。しかしその子は相変わらず先生にかわいがられ、特別扱いされていたので、「いじめ」はそのまま続いていた。

その子が私立中学を受験して、学校が別々になるまで続いた。

今振り返っても、その子の態度が目にあまっていたので仕方がないと思う。

### 面接を終えて

面接調査で聞き取ったケースの中で、多くの者に繰り返し語られたことの1つは、「いじめ」が起こっていたときに傍観者でいたことへの後悔であった。多くの学生が、傍観者は免責されるものではなくて、加害者と同じ立場にあるということに、当時は気づかなかったと言っている。なかには積極的にいじめ行為に加担していた者もあるが、それでも

「かわいそう」と言う気持ちがなかったわけではない。ただそれを上回る「その子が悪いのだから、こういう目にあうのも仕方がない」「かわいそうだが、そうしたらその子の性格も直るだろうから」という判断があったようである。

そして傍観者といっても、おとなの「我関せず」という冷たい傍観ではなかった感じを

受ける。今回の面接で、その感触を得たことが、大きな収穫であったかに思える。かわいそうだという感じが基本にはありながら、「いじめ」が日常化するとそれに慣れてきてしまうという過程があった印象を受ける。目に見えないところで、いじめられっ子をかばったりする子もいたようだし、「どうしてあのおとき、もっと何度も先生に話してあげなかったのか」「もう少し何とかしてあげられたのではないか」「声をかけてあげればよかった」と後悔している者もいる。

「いじめ」に関する著作やレポートを読んでいると、いじめっ子が極悪非道で、傍観者は石のように冷たくて、という書かれ方がされている。しかし、いじめはいじめる側も傍観者側も、やはり友人としてのいじめられっ子の気持ちに、全く無関心なわけではない。気にしながらも、状況に流されていくのだとしたら、そこにわれわれは、「いじめ」問題を打開する手がかりがあるように思える。子どもの中に残っている、「かわいそう」「なんとかしてやりたい」「先生は『いじめ』をどうみているのだろう」という気持ちを手がかりに、大きくいえば、人権に対する教育がなされるべきだし、またそうした教育は成果を

上げるのではないかと思える。昔ながらの道徳教育ではなく、新しい市民教育、人権教育が不足していたのではないだろうか。

また、「クラスのみんなが団結して抗議したらおとなしくなった」「これ以上言ったら、おばさんに言うわよ」と言って、「いじめ」を終結させたケースもあり、母親が気づいて先生に訴えたことから解決したケースもある。先に示したように、今回のアンケート調査の結果では、クラス解体まで「いじめ」が解決できなかったケースが多かったが、聞き取りをしてみると、それでも水面下での小さな動き、とくに個々の子どもの中には動きがあり、行動となりかけたケースもある。なかには「いじめ」の終結にまでもっていったケースもみられる。むろん対応が可能なのは、小学校段階での「いじめ」の場合が多いようではある。

日本の子どもの世界に、これだけ広がってしまった「いじめ」をなくすことは、並大抵のことではできそうもない。しかし「いじめ」をなくすことに、希望を捨ててはいけない。聞き取りの結果を振り返って、それを強く感じている。

## 資料

インタビュー／平野真穂（東京学芸大学学生）

### 担任の指導上の間違いから

（女子）私の小学校は東京郊外の、市の中心地から少し離れたところにあり、学年4クラス。中学校も他の学校と混ざることなく、同じメンバーだった。小学校から中学校にかけて、ずっといじめにあっていたB子と私は、小学校3・4年の時に一緒にのクラスだった。

3・4年生の頃、B子は、菌ごっこや仲間外れの対象だった。4年生の頃はリーダーグループの男の子たちに、女子はよくこづかれていたが、B子は集中的にこづかれていた。皆見て見ぬふりをしていた。一度、殴る蹴るがエスカレートしたことがあり、学級会で、担任が話題にした。担任は「どうして誰も止めなかったのか」と吐き、それからいじめは少し和らいだ。

B子へのいじめは、小学校1年生の給食の時間の出来事をきっかけに始まったらしい。その時の担任は20代の若い女の先生で、ピシッとする厳しい先生だった。ピシッとしたクラスにしたかったようだ。勉強はよくできるクラスで、担任はよくいえば毅然としているが、私には厳しくて冷たい先生という印象だった。

当時給食を残すことは許されなかった。そのために給食の時間がこわくて学校に行けなくなる子、家では食べられるものでも、給食で出されると、緊張のあまり食べられなくなる子も出てきていた。そんな環境の中で、B子は食べたものをもどしてしまった。担任はもどしたものを、無理に食べさせ、それからB子は「ゲボ食べた」と言われるようになりいじめが始まった。B子は、この出来事をずっとずっと引きずった。B子はごく普通の

子で、この出来事がなければ、いじめられることはなかったと思う。

B子へのいじめは、中学校に入ってからもときどきあった。私自身もB子のことを、実際にゲボを食べたのだから「汚い」と思っていたが、中学校に入ってから、「かわいそうだ」という目で見えるようになった。今考えると、いじめを止めればよかったと思うが、実際は何もしなかった。

中学も生徒は同じメンバーだったから、B子にはつらい環境だったと思う。高校ではゲボのことを知っている人もいなくなり、明るくなったと聞いた。小・中学校時代にもB子にはずっと友だちはいた。でも、その友だちもいじめられがちな女の子だった。ゲボのことはさすがに学校で問題になり、学年主任は他の学校に転動になり、担任は別の学年に移された。

### 悪質だったが、陰湿でなかった

（男子）中学1年生の時のクラスはむちゃくちゃだった。同窓会に絶対に出たくないといつも思うのは、いじめ云々よりも荒れたクラスだったからである。いじめというか、不良グループのリーダーが中心になって、クラスの男子がほとんど参加して、毎日のように女子をからかっていた。対象になる女子は、次々変わっていき、ときどきエスカレートしすぎだと感じることもあった。男子の側からすると憂さ晴らしなのだ。こういうことを言っているのかわからないが、リーダーは家庭がうまくいっていない子だった。

僕が中学生だった頃のいじめは、今のいじ

めと質が違うと思う。悪質だけれど、陰湿ではない。僕のところは田舎で、戦前の「いじめ」のようだった。男子がいじめていると女子が「やめなよー」と言って止めていたし、女子同士はいじめられていた子も含めて友だちだった。いじめが行き過ぎると、男子の間からも「やめろ」の声が上がっていた。僕も何度か言ったことがある。それに遊ぶときはいじめられていた子も仲間に入れていた。

「いじめ」というのは、ガキ大将が、グループの中で一番弱い子をいじめるのである。「ノロマ」とか「地元の人でない」とかの理由で。いじめられていたC子さんの場合は、他の中学校からの転入生だった。

小さい頃から地元で遊んで育った子というのは強い。関西では「アホ」といっても愛情表現みたいなところがあるように。しかし、C子さんにはそういうのが通じなかったのだろう。田舎のバイタリティーに潰された感じだった。自分も転入したからよくわかる。僕も最初は仲間外れにされた。その時には悩んだけれども、「このままじゃいけない」と思って相手に向かっていったら、すんなり仲間に入れた。「郷に入っては郷に従え」が大事

で馴染むことができないといじめられるのだ。

C子さんの場合もからかいがエスカレートし、中学1年の時に半年間続いた。ねじを投げられたり、「納豆」と呼ばれて菌ごっこをされていた。ねじ投げの時には、校長室に呼ばれて注意を受けたが、効き目はなかった。「納豆」と呼ばれるようになったきっかけは、給食の時間に納豆を醤油をかけないで食べたからである。ただのこじつけだ。

しかし、C子さん以外にも、「ドッグ」と呼ばれている女の子がいた。その子の場合には、からかわれても「私のことを、そんなふうには呼ばないで」とはっきり言っていた。だからいじめというよりも、けんか仲間だった。はねかえすと、かえって仲よくなる場合もある。いじめがエスカレートするのは、反応がないからだ。C子さんの場合にも強く「やめて」と言えたら止まったかもしれない。「いじめ」か「からかい」かは、本人がどう意識するかが大きい気がする。

そのいじめがどのように終わったかという、C子さんの母親が怒鳴り込んできたからだ。休み時間に飛び込んできて、いきなり「うちの子をいじめちゃダメだ」と言った。





驚いたけれども、効果はなかった。男子自体がいじめだと意識していなかったからである。しかし、その怒鳴り込みによって、「あれはいじめだったのか」と意識したのだ。だから怒鳴り込みの効果はなかったが、変化はあった。いじめと意識させられたときから、C子さんは相手にされなくなったのである。男子も、いじめはいけないことだと教えられていたので、それ以後はいじめなくなった。

いじめられている状態というのは、まだ相手にされているので、ましな気もする。担任はどうしていたかという、何もできずにいた。新任の女の先生で、先生自身がいじめられていた。黒板消しをドアにはさんで待つ、といったようなからかいが、どんどんエスカレートしていた。そういうときに先生は「やめなさい」と高い声と言うが、無力だった。効き目は全然なかった。クラスはすごく荒れていた。担任の授業中は、消しゴムを切ったものなどを先生に投げつけたり、むちゃくちゃだった。いじめというのは、弱くて力のない先生のもとで起こると思う。

いじめという言葉は、使わない方がいい。いじめという言葉を使うと、問題が複雑になる。「いじめ」といっても、1年か、まあ3年で終わることなので、深刻に考えるよりも、試練だと思った方がいい。

いじめられる人ってオーラを発している。具体的にいうと、受け取り方が全部マイナスな人。いじめる側というのは環境が悪かったりで、憂さ晴らしの場を求めている。需要と供給がピッタリなのだ。だから、いじめは今後も決してなくならないし、この問題は解決しないだろうと思う。

### いじめ非行をめぐって

(男子) 僕の中学校は大阪の下町にあった。家が狭かったり、貧乏だったり話題になる学校で、荒れていた。教室で爆竹が鳴ったりバイクで学校に来る子もいた。だから地域からの苦情もよくあって、先生たちはその対応

に忙しかった。大きな問題がたくさんあったので、いじめなんていう小さいものは放っておかれた。だいたい、いじめられっ子が先生に言っても、ますますエスカレートするか、先生の前で「いじめはなくなりました」と言われるかのどっちかだ。手の打ちようがない。

いじめられていたD君は、母親がいなかった。父親というのが面倒を見ない人で、D君に金を渡して「適当にやったれ」という態度だった。だからD君は、中学生にしては金をたくさん持っていた。D君をクラスの5人くらいの子が、使い走りにしていて。例えば「おい、D、ジュースはいくらか。100円。それやったら100円やるから、ジュースを5本買ってこい」という感じ。ほかにマンガも買わせていた。そのいじめはグループ内のことで、グループ外の人には全く関係がなかった。僕は、そのいじめる側の友だちと仲がよかったのだけれど、いじめには加わらなかった。いじめの時は離れていたり、「そんなんするのダサイで」と言ったりしていた。

D君はクラスでも目立たないタイプだった。勉強ができなくて、授業中にマンガを読んだりしていた。こういう使い走りになるタイプが、各クラスに8人くらいはいるものだ。そしてグループの中で1番弱い立場の子がいじめの対象になる。1人をいじめるとグループの中で、連帯感が生まれる。それでD君のようなタイプはいじめられているという感覚がない。自分が使われているのだと、意識していない。上下関係がしっかりとできてしまっているのだ。でも、そういえばD君もときどき複雑な表情をしていた。それに同窓会にも、あまり来ない。

どうして僕がいじめる側にまわらなかったかという、自分が嫌なことは人もされたら嫌だろうなと思ったからだ。

### からかうと面白かった

(男子) 小学校5、6年生の時に同じクラス

だったF子さんは、「汚い」「さわると菌がつく」と言われ、いじめられていた。F子さんは近づくのを嫌がられ、彼女が通るときに机を引かれたりしていた。あだ名は「ブー」だった。いじめの中心になっていた男子は、体は小さいが暴れん坊で、口がうまくて頭がよく、その人のまわりには体の大きな人が集まっていた。男子20人中の15、6人が菌ごっこ、いじめに参加していた。残りの人は無関心だった。女子はいじめには参加していないが、嫌っていた。「遊んであげると、ベタベタしてくるのが嫌だ」と言っている人がいた。

いじめられるようになったきっかけはわからないが、F子さんは気が弱かった。それから体がすごく細かった。残したパンが、机に入りっぱなしのことがあった。風呂に入っていないというウワサもあった。3、4年生の頃から、そういう存在だったので、僕も「汚い」「変なヤツ」という先入観を持っていた。

僕もいじめに参加していた。F子さんが嫌いというより、ゲーム感覚。今思うとかわいそうなおこなったと思うが、当時は一種の遊

びだった。本当に嫌いだったら、しゃべりもしない。F子さんは声が高くて「やめてよー」というのが面白かった。机を離すと元に戻すなど、抵抗もしていた。からかうと面白かった。だから他の人がいじているのを見ても、「またやってるよ」と思っただけだ。悪いことをしているという感覚は薄かった。今考えると「汚い」「変なヤツ」というのは、F子さんにとっては、きつい言葉だったと思う。

6年生の途中から、担任もいじめに気づいた。僕は学級委員だったので、先生に「F子と仲よくしてやってくれ」と言われた。それから僕は、F子さんをいじめなくなった。いじめの人を見かけたら注意もするようになった。注意をするとその時にはやめるが、いじめ自体がおさまることはなかった。一緒になって止める人はいなかった。しかし僕は、F子さんと隣の席になり、しゃべるようになって、かわいそうなおこなったという気持ち<sub>ち</sub>がわいてきた。